

いわゆる「貨幣の前貸と資本の

前貸」の問題について（承前）

三 宅 義 夫

七

ここでこの問題についてのトツク、フライトンの見解にたいしてマルクスが第三卷第二十八章で行っている批判を見ることに入るが、つぎのようにして見てゆくこととする。

既述のように、フライトンについて論じているところでマルクスは、「さて、Aにたいする銀行の前貸は、どの範囲で資本の前貸と看なされ、またどの範囲で支拂手段のたんなる前貸と看なされるべきであるか？」（Ⅲ四九七頁）と問を設けている。そしてエンゲルスは、「ここに続く原文の文章は関連が理解し難いので、括弧の終りまでは編纂者があらたに書き改めたものである」（註）という註を入れ、「このことは、前貸そのものの性質に帰着する。これについては三つの場合が研究されねばならない」として、さきに四六七―四七〇頁で与えた書入れIとほぼ同様な説明を与えている。

だが、私には、ここでエンゲルスが与えている説明は右のマルクスの設問にたいする答としては、つまり「関連」

いわゆる「貨幣の前貸と資本の前貸」の問題について（承前）

の上では、どうにも解せない答の仕方であつて、それはただに一面的であるというよりも、設問との対比においては、見当がまったくはずれているもののように考えられる。したがつて、ここでマルクスはどういうことを問題にしようとしていたのであろうか、そしてマルクスはこの設問にたいしてどういふ答を考えていたのであろうか、ということ、を明かにすることに中心を置きながら、この第二十八章での論評を見てゆく、というようにして考察を進めてゆくこととする。

(註) 1114 Die nun folgende Stelle des Originals ist im Zusammenhang unverstandlich und bis zum Schluss der Klammer vom Herausgeber neu bearbeitet und geschrieben. したがつて、「ここに續く原文の文章は……編纂者によつてあらたに書き改められた」のであつて、書入れⅡは、書入れⅠのようにたんに挿入されたのではなく、どれだけの分量の原文がこの箇所で「書き改められ」ていることになる。エンゲルスの註によれば右のごとくであるが、しかし、のちに見るように、この書入れⅡを抜かして讀むと前後の「関連」がかなり筋が通つて解される、とともに、このあたりでマルクスが採つてゐる考察の運び方の密度から見ると若干抜けてゐる感がある。また、この書入れの内容は前後の「関連」にまったく欠けてゐるように考えられる。かういったことから見て、右の「書き改め」によつてとり除かれた原文は比較的小部分であり、また書き改めというよりもまったくあらたに書下されたものと推測される。

フライントンは、通常、繁栄期には通貨の追加供給を必要とする、これにたいしてイングランド銀行に資本の前貸の要求が殺到するのは、主として不況期である、という。そして、この資本を前貸するさいイングランド銀行は銀行券を用いて前貸するのであるが、前貸は残つても、銀行券、つまり通貨は、それが必要とされない場合には発行者の手もとに還流するものである、とする。つまり、資本の前貸が求められるさいには、通貨の追加供給が求められてゐるのではないからこの銀行券は流通裡にとどまつてゐることを必要とされず、ただちにイングランド銀行に還流するの

だ、といつてゐるのみである。そしてまたこのことから、イングランド銀行の保有する有価証券が増加するような時期には同行の銀行券流通高が減少し、逆の場合にはこの逆だといふ現象がなせ生じるかを説明する。すなわちこの現象は、いかなる銀行もこれにたいする需要をこえて銀行券の流通を増加させないといふことを示しているものであり、かつこれをこえた前貸は銀行の資本のなから行われねばならぬことを示しているものなるべし。(註)

(註) マルタスが引用しているフラーソンの文章は、フラーソンの『通貨調節論』中でこの問題を論じているさわりの文章であるが、標題の方は英文を併載しているが本文の方は独訳して示しており、トマックの場合のように原文で掲げていないから、参考するにこの標題と本文の一部との原文を掲げておく。

標題 —— “A demand for Capital on Loan and a demand for additional Circulation are quite distinct things, and not often found associated.

本文 —— “It is a great error, indeed, to imagine, that the demand for pecuniary accommodation (that is, for the loan of capital) is identical with a demand for additional means of circulation, or even that the two are frequently associated. Each demand originates in circumstances peculiarly affecting itself, and very distinct from each other. It is when everything looks prosperous, when wages are high, prices on the rise, and factories busy, that an additional supply of currency is usually required to perform the additional functions inseparable from the necessity of making larger and more numerous payments; whereas, it is chiefly in a more advanced stage of the commercial cycle, when difficulties begin to present themselves, when markets are overstocked, and returns delayed, that interest rises, and a pressure comes on the Bank for a vances of capital. It is true, that there is no medium, through which the Bank is accustomed to advance capital, except that of its promissory notes; and that to refuse the notes, therefore, is to refuse the accommodation. But, the accommodation once granted, everything adjusts itself in conformity with the necessities of the market; the loan remains, and the currency, if not wanted, finds its way back to the issuer. Accordingly, a very slight examination

of the Parliamentary Returns may convince any one, that the securities in the hands of the Bank of England fluctuate more frequently in an opposite direction to its circulation than in concert with it, and that the example, therefore, of that great establishment furnishes no exception to the doctrine so strongly pressed by the country bankers, to the effect that no bank can enlarge its circulation, if that circulation be already adequate to the purposes to which a bank-note currency is commonly applied; but that every addition to its advances, after that limit is passed, must be made from its capital, and supplied by the sale of some of its securities in reserve, or by abstinence from further investment in such securities. The table compiled from the Parliamentary Returns for the interval between 1833 and 1840, to which I have referred in a preceding page, furnishes continual examples of this truth; but two of these are so remarkable, that it will be quite unnecessary for me to go beyond them. On the 3rd January, 1837, when the resources of the Bank were strained to the uttermost to sustain credit and meet the difficulties of the money market, we find its advances on loan and discount carried to the enormous sum of 17,022,000l., an amount scarcely known since the war, and almost equal to the entire aggregate issues, which, in the meanwhile, remain unmoved at so low a point as 17,076,000l. On the other hand, we have, on the 4th of June 1833 a circulation of 18,892,000l., with a return of private securities in hand, nearly if not the very lowest on record for the last half-century, amounting to no more than 972,000l. 1”

右の文章を一寸見たただでたが注意せむべし。標題は demand for capital on loan と云ふ。同じく demand for pecuniary accommodation (that is, for the loan of capital) と云ふ。この二つは異なる。すなわち capital on loan は貸付に供されてゐる資本、つまり貸付資本のことである。これをこれだけにする需要はいかえれば貨幣融通にたいする需要といふことになるが、フライトンはこれを資本の貸付にたいする需要だと解していることである。つまりこれにあっては、貸付資本にたいする需要はイコール資本にたいする需要だと解されているのである。そしてこれはこれを通貨にたいする需要と対置させているのである。かくてたとえば、マルクスは、イングラント銀行に資本の融資の要求が殺到

するのは主として不況期であるというフライトンの説明を批判するに当って、貸付資本にたいする強い需要は不況期の特徴ではないということをもつてしているのであり、また通貨にたいする需要が増大する場合として、例を資本の前貸とはならなくたんに通貨の前貸にとどまる場合に採らずに、預金が出される場合を採って見ているのも、このためなのである。とともに、のちに見るようにマルクスは、フライトンが資本にたいする需要といっているとき、事實上、いかなる場合を指しているかを明かにしている。そしてこの照明によってフライトンの述べようとしていることが——その正しい点と誤っている点とが——きわめて鮮明にされうることとなってきているのである。なおここで附言しておく、通貨の追加供給が必要とされ、前貸された銀行券がただちに還流しないで流通しているさいにおいても、銀行業者にとつてその銀行券は貸付資本を形成するのであり、その前貸は貸付資本としての投下であることに変りはない。——「イングランド銀行がその地下室の金屬準備によって準備されていない銀行券を發行するかぎりでは、同行は価値章標を創造するのであって、この価値章標は、ただに流通手段を形成するばかりでなく、この無準備銀行券の名目額まで、同行にとつて追加の——仮空のだとはいえ——資本を形成するのである。そしてこの追加資本は同行に追加利潤をもたらす」(Ⅲ五八八頁)。

いま一つ。右でフライトンが、「かくして、この大銀行の事例は、地方銀行業者によって強調される命題の例外をなすものではない」と述べているのは、これらの地方銀行業者は自分たちの業務について述べるさいは銀行業者は流通する銀行券の額——公衆の手にある銀行券の額——を自由に増加させる力はないといっていたが、イングランド銀行について述べる場合にはそうではないように述べていた。そこでトック、フライトンはただにいわゆる通貨主義者にたいしてのみならず、かかる見解にたいするためにも、イングランド銀行にも流通高を増加する力はないということを大いに強調しているのである。なお、当時イングランド銀行は公的な、いわゆる中央銀行たる性格をいまだ純化しておらず、他の銀行と並ぶ特権的大銀行という性格を持っていた。そして事實上ロンドンにおいては同行だけがもっぱら券券を行っていたのにたいし、地方では個人銀行業者が銀行券を發行し、それは地方的に流通していた。

マルクスは右のフライトンの見解にたいして、まず、繁栄期には流通媒介物にたいする需要が増大するということが明かであり、そのために預金を引出すとしてもそれは資本にたいする需要の増大ではないことも明かであるとす

る。また、貸付資本にたいする強い需要は不況期の特徴ではなく、不況期に強い需要が生じるのは繁栄期に貸付資本が異常に需要された結果であるといえるのであるとし、また不況期には資本家間の流通手段の需要が増大するとする。つまり、繁栄期——通貨にたいする需要の増大、不況期——資本にたいする需要の増大、というフライトンの定式、かかる対立づけが、完膚なく批判され、正しい見解が打ち出されている。しかし、ここどころは（Ⅲ四九一—二頁）、内容としては、マルクスがさきにトックスにたいして行った論評を要約的にくり返しているものであって、上の批判点はすでにトックスのところでは批判済みである。

かくてマルクスはこのフライトンのところでは主力をつぎの点の解明に注ぐ。すなわち、「さて、フライトンその他にとり決定的に重要なこととして眼につくのは、イングランド銀行の保有する有価証券——貸付担保（Leihpfänder）（註）および手形——が増加するような時期には同行の銀行券流通高が減少し、逆の場合にはこの逆だという現象である」（Ⅲ四九二頁）と。

（註） ここで貸付担保といっているのは、貸付のさいの借用証書ではなく担保証券が券準備となっているからである。

マルクスはまず、フライトンがそこで、右のようなこの大銀行の実例は、地方銀行業者によって強調される命題——すなわち、いかなる銀行もそれにたいする需要をこえて銀行券の流通を増加させえないのであって、「この限界をこえたのちは、その銀行の前貸のあらゆる追加はその銀行の資本のなかから行われねばならず、準備として保有している有価証券の若干を売るか、かかる有価証券へのそれ以上の投資を断念することによって調達されねばならぬ」（傍點—三宅）という命題——の例外をなすものではない、と書いていることから、「だが、ここで、フライトンが資本をなんと解しているかもわかる」とし（註）、「資本なる言葉はこの場合、ただ銀行業者の意味でのみ使用されて

いるのであって、銀行業者は自分のたんなる信用よりも多くのものを貸付けることを余儀なくされている、ということの意味する」(Ⅳ四九三頁)とする。

(註) “Hier zeigt sich aber auch, was Fullarton unter Kapital versteht.” 想ひをたたい、——“Hi-r haben wir endlich, was er [Overstone]unter Kapital versteht” (S. 473). ここではマルクスは、オーヴァーストーンが、かれが資本というとき貸付資本のみを眼中に置いていっていることを、問わず語りはつきり露わしていることを、指摘したのであるが(本誌前號、五二頁参照)、フラートンはオーヴァーストーンの場合とはことなり、自己の資本のなから貸付けるときとそうでないときとの区別を強調しているのである(だが同時に、前の註で記しておいたように、フラートンは貸付資本にたいする需要とこの自己の資本のなから貸付けることを同一視していることがこれと結びついているのである)。マルクスはすでに見たようにオーヴァーストーンにたいし「偏狭な銀行業者的立場」(Ⅳ四六四頁)といっていたが、フラートンにたいしてもまた、「資本なる言葉はこの場合ただ銀行業者的意味でのみ使用されている」といっている。だが、この二人の間にはかかる同一性が存すると同時にかなり大きな差異があるのである。なおトゥック——これはフラートンと同様である——にたいしてもマルクスはつぎのように記している、——「このいい方〔通貨と資本とを区別するいい方を指す——三宅〕は、トゥックにあっては、かれが単純に、自己の銀行券を發行する銀行業者の立場に立っていることから来ている。たえず——つねにちがった銀行券から成り立つとはいへ——公衆の手にあって、流通手段として機能しているかれの銀行券の類は、かれにとっては紙と印刷以外になんらの費用もかからない。それはかれ自身宛に振出された流通する債務証券(手形)であるが、これはかれの手に貨幣をもたらし、かくしてかれの資本を増殖する手段として役立つのである。だがそれは、かれの資本——これが自己資本であるか借受資本であるかを問わず——とは相異なる。だから、かれにとっては流通手段と資本との独自の区別が生じるのである、しかし……」(Ⅳ四八六頁)。

このようにマルクスは、フラートンが資本というときそれがどういう意味で使われているかをまず明かにしたのち、右のイングランド銀行の保有する有価証券が増加するようなさいに同行の銀行券流通高が減少するということが、

いわゆる「貨幣の前貸と資本の前貸」の問題について(承前)

かにして生じうるかを問題とする。そしてマルクスは、イングランド銀行は前貸を自分の銀行券である——という前提の下で——、それにもかかわらず保有する有価証券が増加するさいにつまり前貸——割引および担保貸付——が増加するさいに銀行券流通高が減少するとすれば、「流通に投ぜられた銀行券はどうなるか、いかにしてそれは同行に還流するか？」（Ⅳ四九四頁）というように問題を立てる。

これはつぎのようにして考究されている。まず第一に、借手が金を輸出するために前貸を受ける場合。——この場合には前貸された銀行券は金とひきかえられて同行に還流する。ここでマルクスはインステイトゥート版で三頁ほどにわたって（Ⅳ四九四頁上から十三行目から四九七頁上から二行目まで）横道に入り（註一）、四九七頁上から三行目のところでまた元に戻って、「ところで、金の流出のことはしばらくおき、銀行券を発行する銀行——かくてたとえばイングランド銀行は、いかにして、その銀行券発行を増加することなしに、その供与する貨幣融通額を増加することができるか？」とし、「この還流は二様の仕方が生じうる」とする（註二）。

（註一）この横道の部分は、章末のⅤ五〇二頁の終りから五〇三頁にかけての箇所で、とくに、連繫されている。

（註二）一言注意しておく、ここでマルクスが「そのために発行された銀行券はふたたび同行に還流しなければならぬ、というのは、そうでなければそれは通貨の額を増加させることになるが、そういったことはまさに生じないはずになっているからである」（Ⅳ四九七頁）と記しているのは、いまここでイングランド銀行の保有する有価証券が増加するさいに同行の銀行券流通高が減少するという現象がいかにして生じるかという問題を論じているからなのであって、右の文章をかかると説明の進行過程から引離して読み、マルクスは一般的に右のようなことがいえるといっているのだと解してはならない。そう解すると大へんな誤解を生じるおそれがある。すぐに還流する場合もあるし、しない場合もあるのである。なお、事態を明快に説明しているものとして、つぎの記述を見られたい。「もしも、割引に呈示された手形の分量と『通貨の必要』とが、つまり本来の意味での貨幣流通の必要とが、同一であるならば、銀行券流通高は割引かれた手形の分量によって決定されなくてはならないであ

ろう。けれどもこの運動は、多くの場合、平均して、たんに平行して、ないばかりか、むしろしばしば反対になっている。割引手形の分量とそこにおける変動とは、信用にたいする需要をあらわしているのであつて、他方、流通している貨幣の分量は、まったく別の影響によつて決定されるのである」(『経済学批判』の準備的勞作から)、邦譯、マルクス・エンゲルス選集、第九卷下、二八六頁)。

還流は一つは、イングランド銀行がAにたいして有価証券とひきかえに銀行券を支拂い、Aはこの銀行券をもつてBにたいして満期手形を支拂い、Bはこの銀行券を同行に預ける、ということによつて生じうる。いま一つは、AはBに支拂い、そしてB自身、またはBからさらに銀行券を支拂われるCが、この銀行券をもつて同行にたいして満期手形の支拂いをする、ということによつて生じうる。前貸された銀行券はこのように流通を経てから、同行に預けられるまたは支拂われることによつて、還流しうる。

これを同行の貸借対照表について見ると——といっても、一八四四年の条例で定められている同行の週報は特異な形式をとっているので以下のように示されることにはならないのであるが、事態を明かにするにはそれをまた一般的な普通の形に直して示さねばならないので、便宜上はじめからこの普通の形で示しておく——、前貸が銀行券で行われることによつて、資産の部で有価証券が増加し負債の部で銀行券発行高が増加する。預けられた場合、——この銀行券発行高の増加が消え、代つて預金が増加することになる。支拂われた場合、——負債の部で銀行券発行高の増加が消えることは同様であるが、と同時に資産の部にある有価証券が減少する。なお、さきの金とひきかえられた場合、——負債の部で銀行券発行高の増加が消えると同時に、資産の部で金保有高が減少することになる。

かくて、「流通に投ぜられた銀行券はどうなるか、いかにしてそれは同行に還流するか」というさきに立てた問題

にたいして、マルクスは答え終えたことになる。

ところで、フラートンはさきに見たように、イングランド銀行の保有する有価証券が増加するような時期には同行の銀行券流通高が減少するということは、いかなる銀行もそれにたいする需要をこえて銀行券の流通を増加させえないということを示しているものであり、これをこえた前貸は、銀行券を用いて行うとはいへ、銀行の資本のなかから行われねばならぬことを示しているものである、とした。そして、概念の不明確さと結びついてやや混乱した形ではあったが、事實上、資本の前貸——銀行の資本のなかから行われねばならぬ前貸——にたいする需要と通貨の前貸——たんに銀行券の増発ですむ前貸——にたいする需要との区別を指摘せんとした。そこでつぎに、この点の立入った考察が論理的な順序として当然に問題となる。——つまり、フラートンの指摘せんとするものを明確にするということがいまやここでなされるべきこととなるのである。

かくてマルクスはいう、——「さて、Aにたいする銀行の前貸は、どの範囲で資本の前貸と看なされ、またどの範囲で支拂手段のたんなる前貸と看なされるべきであるか？」（註）と。

（註） ここでAといっているのは、上の設例でのAである。また銀行も上の設例を受けてイングランド銀行を指す。したがって同行と訳した方が適切なのではあるが、便宜上ただ銀行としておく。また支拂手段といっているのは、上の設例でAがBに満期手形を支拂うということになっているから、つまり前貸された銀行券をAは支拂手段として使用するということであつた——還流する例としてはその方が都合がよかつたので——からにすぎなく、したがって一般的问题を出すならば、Aがこれを狭義での流通手段として使用するさいも含めて、通貨と云うところなのである、と考えられる。しかしまた、フラートン等が流通手段としての貨幣と支拂手段としての貨幣との区別を通貨と資本との区別に転化しているので、銀行が支拂手段を前貸するさいにも資本の前貸となる場合とそうでない場合つまり支拂手段のたんなる前貸である場合とがある、として、いかなる範

困で云々といっているものかとも解される。いかなる範囲で資本の前貸となるかということを見る上には右のいずれに解しても同じことではあるが。

この設問にたいする答はいかになされねばならないか。まず、エンゲルスの書入れが入っているつぎのところでマルクスが説明している行文の筋を辿って見て見よう。ここでマルクスが説明していることは、(一)「私營の發券銀行」にあつてはしかじかの場合にはその銀行券の前貸が「その銀行資本の一部分を代表する」ことになる——つまり「資本の前貸」となる、ということ、および、これと同様なことは「イングランド銀行」または「銀行券の發行限度が法定されているその他の銀行」にあつてはしかじかの場合についていえる、ということである。そしてついで(二)、前貸が増大しても通貨の數量を増大させないということは「通貨が純粹に金屬であつたとしても」(四九九頁) 生じうることであることを附言し、つぎに(三)、「これまでのところでは、前貸は銀行券で行われ、かくしてすくなくとも一時的な——すぐふたたび消えるにしても——銀行券の發行増加を伴うものと、前提されていた。だが、そのことは必要なことではない」(四九九—五〇〇頁)として、帳簿信用がAに与えられる場合を採り上げ、Aが銀行宛に振出した小切手が他行に入金となつて手形交換に廻り、さきの銀行がこれにたいして支拂わねばならぬとき、「この場合には、同行は、Aにたいしてその銀行資本の一部を前貸したのである」(五〇〇頁)とする。ついで(四)、上を見て来た貨幣融通が「資本にたいする需要」であるかぎりでは、その「資本」とは「銀行業者の立場から見ての資本」(同上頁)であるとして、銀行の資産の部を構成しているところの(1)現金、すなわち金または——私營銀行のさいには——イングランド銀行券、ならびに(2)有価証券について考察し、「したがつてここでは、資本はただ貨幣資本として役割を演じているのであり、また現実の貨幣形態で存在していない場合にはたんなる資本名義としてである」(同上頁)とし(註)、

つけ加えて、「銀行資本の拂底およびそれにたいする切迫した需要」（傍点→マルクス）と「現実資本の減少」（傍点→マルクス）と混同してはならぬという注意を一言している。かくて、マルクスが以上ここで述べている内容を見ると、それはさきの設問にたいする答たるべきものである、ということが、できるのである。そしてもしこのようにいいうるならば、エンゲルスがこの設問にたいして与えている説明は見当がまったくはずれたものであるといわれなくてはならないことになる。

（註）このように「資本」なる語は、フラートンにおいてそしてまたマルクスのここでの考察において、「銀行資本」の意味で用いられている。このことはさきに見たようにフラートンの命題についての考察のまず劈頭において指摘されていたことであるが、ここではさらにその銀行資本がなにから成っているか、その諸成分の性質について述べているのである。そしてこれの立入った考察としてつぎの第二十九章「銀行資本の諸成分」がこれに連繫しているのである。「銀行資本の諸成分」の章が、「いまや、銀行資本はないから成り立つかを詳しく吟味することが必要である」（傍点→三宅）という書き出しとなっているのはかかる理由からである、と考えられる。

一言つけ加えておくと、銀行資本——Bankkapital. これを Bankierkapital というときは、Bankier が普通に個人銀行業者を指している語であるから個人銀行業者に限定されるといううちがあるだけで、やはりこれと同義。だが第二十九章でも用いているところの——Ⅱ五〇八頁——banking kapital は、銀行業者自身の投下資本と区別された借り受けた資本——預金または自己の銀行券発行などによって——を指す。Ⅱ四四一頁でのギルバートからの引用を見られたい（同書一九二二年版では p. 131）。長谷部氏が第二十九章冒頭に附しておられる訳註はこの点妥当でない。

行文の筋道を辿ることをいままさこし続けると、以上の考察をもって、マルクスがフラートン批判において主力を注いでいるところの、イングランド銀行の保有する有価証券が増加するような時期には同行の銀行券流通高が減少し、逆の場合はこの逆だという現象についてのフラートンの説明にたいする検討の基本的部分を了えたわけである。かく

てマルクスはいう、——フライトンの挙げているような現象がいかにして生じるかは「かくてきわめてかんたんに説明される」(Ⅲ五〇一頁)と。そしてつけ加えて、前貸需要が殺到する不況期には、流通手段の量は(1)金が流出することによっておよび(2)たんなる支拂手段としての貨幣が必要されることによって、制限される。しかしこの場合フライトン等が仮定しているように(註一)前貸された銀行券はぜんぜん流通しないというわけではない、とする。購買手段として機能する銀行券の流通がかかる不況期には減少するから、支拂手段としての銀行券の流通が増大しても通貨の総量は不変または減少しうるのである。ついで、支拂手段としての通貨の流通の増大が購買手段としての通貨の流通の減少よりも大であるさいには、通貨の総量は増加することになるとして、恐慌期における重要な現象の原因を説明する。すなわち、「かかることは恐慌の一定の瞬間に、すなわち信用が完全に崩壊するさいに、現実に生じうる」(Ⅲ五〇一—二頁)と。そしてフライトン等は支拂手段としての銀行券の流通が恐慌期の特徴だということを理解していないと批判する。かくてついで、既述のマルクスによる問題提起Ⅱが行われるという順序になる。視角がつぎのように移動される。——「なお、つぎのような質問が生じうる。——いったい、かかる逼迫期に欠けているのはなんであるか？ 資本であるか、それとも、支拂手段としての規定性における貨幣であるか？ そしてこれは周知のように一つの論争問題である」(Ⅲ五〇二頁)と。すなわち、フライトン等は銀行業者の見地から資本の前貸となると一方的に把え、求められるのが支拂手段としての銀行券——まさに通貨——だということをはっきり見ないでいる点を衝いているのである。そしてここで第一に金の流出について考察し、つぎに「金にたいするかかる需要を度外視」した場合いづれにしても逼迫の原因は商品資本の欠乏ではないとして、この問題に後段で立ちかえるとする。けだし、これについての立入った考察はもはやこの第二十八章で論じうる範囲をこえているからである(註二)。そして「貨幣資本と現実資

いわゆる「貨幣の前貸と資本の前貸」の問題について（承前）

五六

本」の諸章がこれに連繫してゐるのである。

〔註一〕 ここで括弧して、「（貨幣融通を貸付資本の、追加資本の、借用と同一視するこれらの誤謬の結果として）（Infolge ihres Irrtums, wonach Geldakkommodation einerlei sei mit Aufnahme von capital on loan, von Zusatzkapital）」（Ⅲ五〇一頁）という書入れが入っているが、この文章は意味が分らない。いろいろに推測されるが、結局意味をなさない文章であるというほかに、書誤りではなからうか、と考えられる。

（註二） 前号で、マルクスがこの問題提起Ⅰにたいして解決を十分につけずに後段に譲つてゐることにかんして、「マルクスは上のように答えるべきである」というこの程度の指摘であればすでにいく度もくり返している。そしてこのようなくり返しは、オーヴァーストーンが、またトビツク、フライトンが、貨幣と資本との関係についてそれぞれ誤った見解を示している、それを論評する上から当然にそうなるというほか、やはりこの原稿がこのままの形で発表するために書かれたものでないことにもよるのである」（三四頁、註）と記しておいたが、これは叙述の形式についてのことであつて、考察の進め方については、考察はその内的関連性において、驚くべき正確な順序をもつて進められてゐるのである。

八

さてここで改めてさきの問題——「Aにたいする銀行の前貸は、どの範囲で資本の前貸と看なされ、またどの範囲で支拂手段のたんなる前貸と看なされるべきであるか？」——についてやや立入って見、そしてこの設問にたいする答はいかになされねばならぬとマルクスが考へていたか、ということを明かにすべく試論を述べておこう。

まず、すぐ前でマルクスが挙げてゐる還流する場合——つまり「ところで、金の流出のことはしばらくおき、銀行券を發行する銀行——かくてたとえ、イン、グ、ラ、ン、ド、銀行は、いかにして、その銀行券發行を増加することなしに、その供与する貨幣融通額を増加することができるか？」（傍點—三宅）として考察してゐた場合——から見て見よう。

前述のように、前貸が銀行券で行われることによって、同行の貸借対照表において資産の部で有価証券が増加し、負債の部で銀行券発行高が増加する。第一の場合、すなわちAからの銀行券を受取ったBがこれを同行に預け入れた場合には、この銀行券発行高の増加が消え、代って預金が増加する。発行された銀行券がただちに還流するので流通裡にある銀行券の数量は増大しないが、しかしといって、同行の現金準備——金準備——が減ることにはならぬ。つまりこの場合には、同行は金準備を減じることなく前貸を増加することができたことになる。この預金が引出され、しかもそのことによって同行の金準備が減少するにいたることもありうることであるが、しかしそのことは、右の銀行券がただちに還流しないで流通裡にある場合つまりAにたいする前貸が同行にとつて「なんらの費用もかからぬ」（Ⅲ四八六頁）場合にあつても銀行券はこれとひきかえに金が求められることがありうるのと、同様であり、この後の場合を「資本の前貸」と區別するならば、前の場合すなわち預金となる場合も、Aにたいするこの前貸は「資本の前貸」とはならないといわれなければならない。「Bはかくして銀行の資本のうち照応する部分を自由にしようのである（B verfügt damit über einen entsprechenden Teil des Kapitals der Bank）」（Ⅲ四九七頁）とは、この前貸によって同行はAにたいする——またはAが割引に附した手形の支拂人にたいする——債権を取得することとなつたが、他方でそれだけの額——割引料だけすくないがこの点は度外視する、以下同じ——Bにたいして債務を負うことになる、ということはいいかえてゐるにすぎなく、Aにたいする前貸が「資本の前貸」と看なされるべきであるということをしてゐるものではないであらう。かつ、預金に対応する有価証券は、同行が信用の創造によつていわば無から取得したものであり、前から銀行が持つていた資本ではないのである。ちなみに、フライトンは前に掲げたように、いかなる銀行もそれにはたいする需要をこえて銀行券の流通を増加させえない、そして「この限界をこえたのちは、そ

の銀行の前貸のあらゆる追加はその銀行の資本のなから行われねばならぬ」（傍點—三宅）としている。フライトンの誤れることは明かであり、かつまたフライトンのようにかんたんにはいいえないのである。したがってまたさきの設問がここで出されているわけである。マルクスはさきにフライトンの命題を最初に掲げたさいにすでに、ただちにこの点を衝いている。——「貨幣融通にたいする需要が、金（ウィルソン、トック等が資本と呼ぶもの）にたいする需要とけって同一たることを要しないということは、イングランド銀行総裁ウエグラン氏のつぎの証言によってわかる」（Ⅳ四九二頁）と。ここでウエグランは、前貸された銀行券が、諸銀行を通しておよび直接に、預金として同行に還流するさいは、同行の現金準備（註）を減少せずに手形割引をなしうる、ということ述べているのである。またのちに第三十三章のところでも、「銀行券の発行はかならずしも（nicht in allen Fällen）資本の前貸を意味するものではないということは、すでに上で見たところである」（Ⅴ五八五頁）と記しているが、その一つの場合がこの預金となる場合なのである、と考えられる。

（註）ここでウエグランが、「公衆がより多額の活動的な通貨を要求しないかぎり、〔銀行券の——マルクス〕準備を減少させないでしよう」（傍點—三宅）とか、「公衆が自分の銀行券を諸銀行に拂込まないで固持するようなベニックが国内に起らない場合には、準備はかくも巨大な取引によっても影響されないでしよう」とかいつているのは、イングランド銀行の銀行部について述べているからである。いうまでもなく、銀行部にとっては、発券部から受取っている銀行券が現金準備を形成している。しかし、信用需要が資本にたいする需要と同一でないといいまこのところの論証上は、かかる証言であっても別に差つかえとなることはない。

つぎに、還流する第二の場合、すなわちAから銀行券を受取ったB等がこれをもって同行にたいするかれらの債務を支拂った場合には、負債の部でこの銀行券発行高の増加が消え、資産の部では、さきにAにたいしてなした前貸に

よって有価証券保有高が増加したがいま満期手形が支拂われたので、増減がない。つまり、Aにたいする前貸は、通貨の数量の増大も、同行の現金準備の減少も、保有有価証券の減少も、いずれももたらさない。だがこの場合Aにたいする銀行券の前貸が行われなかったとすれば、満期手形の支拂によって既発行のイングリッド銀行券が入ってくることにより、銀行部の銀行券での準備金が増大したはずであるが、Aにたいして銀行券の前貸が行われたためにこれの増大を来たさなかつたとして、この前貸は同行の資本のなかから行われたに等しい、と看なされるべきであろうか？ または——結局同じことであるが——、Aにたいする前貸は結局他方での有価証券の減少を伴ったのであるからとして、資本の前貸と看なされるべきであろうか？ これにたいする答は、資本の前貸となるかどうかということがない問題になるか、という点からなされなければならない。これは「たんなる分類の問題」ではなく（トウック）、一般的にいうと、銀行券での前貸がたんに銀行券の発行にとどまらずただちに銀行の現金準備にはね返ってくるという、きわめて実際の必要上問題にされていることなのである。したがって、右の場合には、同行はAにたいする前貸を現金準備を減じることなくしてなしたのであるから、そういう意味では「資本の前貸」と看なされるべきではなく、「支拂手段のたんなる前貸と看なされるべき」である、と考えられる。しかし、事実上これとほぼ同じ場合について、すなわち手形交換において自行の行うべき請求権が自行あての小切手をもって決済された場合について、マルクスは、「この場合には、同行はAにたいしてその銀行資本の一部分を前貸したのである、——というのは自分自身の債務請求権を前貸したのだから」（Ⅲ五〇〇頁）と述べている（註）。現金準備が広義に解されているのであって、これにしたがえば、この場合についても「資本の前貸」と看なされるべきであるということになる。

（註） この場合は期日の来たところの、支拂場所が他行である手形類についていっているものであって、かかる他行拂手形は今

いわゆる「貨幣の前貸と資本の前貸」の問題について（承前）

日、市中銀行においていわゆる現金準備と看なされているものほとんど大部分を占めている。

つぎに、Aに前貸した銀行券がそのまま流通裡にとどまっているならば——他行の金庫のなかに準備金として存しているさいも含めて——、同行はなんら要費するところなくして前貸を増加することができたことになる。かかるさいには、同行は「自分のたんなる信用」（Ⅲ四九三頁）を前貸するにすぎないことは、明かである。

ところで上来「たとえばイングランド銀行は」としてイングランド銀行を例にとつて見て来たのであり、したがって、発行した銀行券が流通裡にあるというさい、それがどこにあるかは問題とならないことであつた。「同行の門外にあるすべての銀行券は、それが流通しているか私的在庫に眠っているかを問わず、同行自身にかんしていえば流通状態に、すなわちその所有の外部にあるのである」（Ⅲ四九七頁）。還流について見たさいにも、たとえば預金となるというとき、B等がイングランド銀行に預金すれば還流となるが、他行に預金しても銀行券発行高が減少しないにすぎなく、またこの他行がイングランド銀行に預金すれば還流となる、といった工合であつた。だが、「私營の發券銀行にあっては、つぎのような區別がある」（Ⅲ四九九頁）。エンゲルスの書入れのすぐ後のマルクスの文章は右の句ではじまっているが、さきの設問とこの句との間には、論理的な考察の運び方として、およそ上来見て来たような内容のことが介在していることになる、と考えられるのである（註）。

（註） マルクスがここでこういった内容のことを果して書いていたか、あるいはこういったことは設問の前で見て来たことを設問の視角から繰返して見たにすぎないともいえるから、この原稿執筆のさいには、頭の中で考えるにとどめていたかは、マルクスの原稿を見ないかぎりなんともいえないことである。なお、インスティトゥート版では「マルクスの原稿に基すく改訂」（Ⅲ編輯部の序、「一二頁」）を行ったとしているから、原稿は存在しているわけである。

「私營の發券銀行にあっては、その銀行券が地方的流通裡にもとまらず、といつて、預金の形態でか満期手形の支拂のためにかその銀行自身に帰ってくることもないとするれば、その銀行券は、その銀行がそれと交換して金またはイングランド銀行券を支拂わねばならぬ人々の手に歸する、といつた區別がある」(四九九頁)。たとえば、Aから甲銀行の銀行券を受取ったBがこれを自己の取引銀行乙銀行に預金するとしよう。乙銀行はただちに甲銀行にたいしてこれとひきかえにイングランド銀行券の支拂を求める、あるいはイングランド銀行における甲銀行の預金口座から乙銀行の口座にその額が振替えられねばならない。乙銀行の貸借対照表においては負債の部でBの預金が増加し、資産の部で現金——イングランド銀行券またはイングランド銀行への預け金——が増加するが、甲銀行にあっては、負債の部で銀行券發行高が減少し、その代り現金がそれだけ減少する。またたとえば、Bの取引銀行が甲銀行であったとしても、Aから銀行券を受取ったBがイングランド銀行券で支拂をする必要があるならば(註一)、これとひきかえにイングランド銀行券を求める。甲銀行の負債の部で銀行券發行高が減少し、現金がそれだけ減少すること、同様である。かくしてこれらの場合、甲銀行のAにたいする銀行券の前貸は、はねかえって同行の現金準備の減少をもたらしことになる。そして現金準備が不足のさいには、同行のコールを回収するとか、手持ちの有価証券を売るとかして、現金準備を補強しなければならない。かくしてこの場合には、Aにたいする前貸は「その銀行資本の一部分を代表する」(同上頁)こととなる、——つまり「資本の前貸」となる(註二、三)。

(註一) この場合たとえばBがロンドンで支拂をする必要があり、甲銀行の銀行券とひきかえにロンドン宛の手形を求めるならば、この手形の期日にいたつてはじめて甲銀行はそれだけの現金準備を失うことになる。かかるロンドン宛手形の振出は、當時地方銀行業者にとつて自己銀行券の發行と並んで信用を創造する主要な方法の一つとなつていたのである。期日にいた

い、いわゆる「貨幣の前貸と資本の前貸」の問題について(承前)

って、はじめて同行はイングランド銀行券またはイングランド銀行への預け金を減じることになるのであり、かかるさいは自行銀行券とひきかえにいま一度ある期間——たとえば二十一日間——自分のたんなる信用を前貸することになるのである。Bがただちにイングランド銀行券を求める場合と区別がある。

(註二) この銀行券が交換を経たまたは店頭で呈示されるまでは「資本の前貸」とはならない。だがかかる流通はごく短時日であるので度外視されているのである。

(註三) 私營の發券銀行においては、その銀行券の流通地域がきざられていたので、それとひきかえにイングランド銀行券が求められることがすくなくなかつたであろうし、また自己の店舗網が發達していたわけでないから、前貸した銀行券が直接に自行に還流することはすくなくなかつたであろう。したがって、自分の銀行券での前貸が上のような結果をもたらすことがむしろ普通であつたであろうと思われる。そして、そういうことが当時地方銀行業者たちが銀行券の發行を、そしてその還流を、イコール「資本の前貸」として論じていたことの背景をなしていたものであつたであろう、と思われる。

右の点は、イングランド銀行にたいしてもつ私營の發券銀行の「區別」、相異点である。そしてイングランド銀行にあつてはかかることがないから、金とひきかえられるために銀行券が還流する場合のほかは、前貸した銀行券のたんなる還流は銀行券發行高が減じるとどまり、その前貸が「資本の前貸」となることはない。だが、同行としてはまた私營の發券銀行とことなつた別の悩みがある。「資本の前貸」となるつぎのような場合がある(註一)。すなわち、上に見て来たのは、イングランド銀行が金屬準備の額をこえて發行しうる銀行券の法定限度にまだ余裕のある場合についてであつた。だが、すでにこの無準備發行の法定限度——当時一千四百万ポンド——に達しているさいには(註二)、銀行券で前貸するためには、まずこの自己の銀行券を入手しなければならぬ。そのためには手持ちの有価証券を売つてこの自己の銀行券を流通から引上げねばならない。「この場合には、この同行自身の銀行券は同行の可動銀行資本の一部分を代表する」(三四九頁)。「この銀行券はいまや資本を表示する。けだし同行は、これを得るためにあ

る現実的価値を、利子生み証券を、譲渡したのであるから」(三四九三頁)。

(註一) このことは、「銀行券の発行限度が法定されている」銀行について一般にいえることである。なお、一八四四年のイングランド銀行条例によって、イングランドおよびウェールズの既存の私営発券銀行はその券券は継続することを認められたがその額は従来額をこえてはならぬとされた。また翌年スコットランドおよびアイルランドの諸銀行にたいしてもイングランド銀行に似た——発券高の三分の一は金属で準備されねばならぬという——発券制度が採られることとなった。

(註二) 同行の銀行券発行高がすでに法定限度に達しているということは、「その銀行券の流通高が、銀行券通貨が普通に充用される諸目的にすでに適合している」(フラートン、前掲文) かどうかということとは、ぜんぜん別の事柄である。

以上においてはさきの設問の前の還流についてのところでマルクスが「金の流出のことはしばらくおき」としていた限定にしたがって、金が流出する場合については考察外においてきた。したがってここで、この場合についてつけ加えておこう。Aが銀行券とひきかえに金を求めるならば、銀行券発行高の増加が消えると同時に、資産の部で金が減少する。かかるさいにはAにたいする前貸が「資本の前貸」であることは、明かである。「それはあたかも、銀行券の媒介なしに同行「イングランド銀行」が直接に金を支拂ったのと同じである」(三四九四頁)。「いま人が、同行「イングランド銀行」がこの場合前貸するのは資本であって流通手段でないと云うとき、これには二つの意味がある。第一には、同行が前貸するのは信用ではなくて現実的価値であり、同行自身のまたは同行に預託された資本の一部分である、ということである」(同上頁)。私営の発券銀行にあってもこの場合イングランド銀行とことなることはない。もし金が手許にないさいには、金のかわりにイングランド銀行券またはイングランド銀行への預け金が減ることになる。

つぎに、前貸が銀行券で行われるというこれまでのところでの前提をはずして、前貸が帳簿信用で与えられる場合

いわゆる「貨幣の前貸と資本の前貸」の問題について(承前)

をかんとたんに見よう。この場合においても、銀行券で前貸が行われる場合と事態において本質的には変りはない。

帳簿信用がAに与えられる場合、——資産の部で有価証券が増加し、負債の部で預金が増加する。Aはこれに宛て小切手を振出してBに支拂う。この場合Bがこの小切手を入金する取引銀行がAと同一であるときと、そうでないときとの区別がある。銀行が同一であれば、Aの口座からその金額が落されBの口座に振替えられるにすぎない。ことなる銀行であれば、手形交換を経て、支拂が求められることとなる。このうちの場合には、前貸が銀行券で行われる場合と同様に、私営銀行とイングランド銀行とはことなってくる。私営銀行にあっては、同行の銀行券が他行の手に入った場合と同様であって、右の支拂は現金——イングランド銀行券またはイングランド銀行への預け金——のそれだけの減少となる。またBがその支拂銀行の店頭で現金拂を求めらば、現金がそれだけ減少することになる。だがイングランド銀行であれば、これまたイングランド銀行券が他行の手に入った場合と同様に、他行に入金となつた小切手金額だけ、その他行のイングランド銀行への預け金が増加することになるにすぎない、——金での支拂が求められないかぎりは一。

ところで、帳簿信用を与えた甲銀行としても他行にたいして同様な請求権をもっているはずであって、交換所において他行から持出された自行宛手形と自行からの持出手形——他行拂手形——とを相殺して、前者の方が多いさいにはじめて実際に右の現金の減少となるのであり、後者の方が多いさいには交換尻だけ現金が増加し、両者が丁度相殺されてしまうならば現金の増減も生じない（註一）。この場合は、他行の手に入った同行の銀行券が現金で支拂われねばならぬということ、満期手形が自己の銀行券で支拂われるということが重なり合っているさいと同様であって、要するに、他行から求められた右の小切手の支拂は、相殺されるかぎりにおいては同行が他行にたいしてもつ請求権に

よって、相殺されえないかぎりにおいては現金によつて、つまり、いずれも同行の資本のなかから、支拂われるということになる。イングランド銀行のさいには、同行が他行にたいしてもつ請求権と相殺されるかぎりにおいて、満期手形が同行券で支拂われるさいと同様である。マルクスは丁度相殺されてしまう場合を採つて——したがって私営銀行にもイングランド銀行にもともにあてはまることになる——前記のようにつきのようについている、「この場合には、同行はAにたいしてその銀行資本の一部分を前貸したのである、——というのは、自分自身の債務請求権を前貸したのだから」(前出)と。かくてかかる場合「資本の前貸」と看なされるべきであるということになる。

さきの設問にたいする答としては、マルクスの見解にしたがえば以上のようなことになる、と解される。(すくなくとも方向にはまちがいはないと思うが、内容にかんしては右のように解することがマルクスの見解として嚴密にまちがいないところであるかどうかについては疑念がまったくないわけではない。だが、いまのところ、マルクスの元の原稿が分らないかぎり、これ以上いかんともしがたい)。そして右に見て来たようにフライトン等の所説には諸々の誤りがあり、問題はしかくかんたんにはいいえないので、マルクスがそこに、「Aにたいする銀行の前貸は、どの範囲で(inwiefern)……と看なされるべきであるか(ist zu betrachten?)」という形で改めて設問を出しているわけなのである、と考えられる。そしてこれにたいして右のように答えた上で、前記のようにマルクスはついで、ここでいう資本の意味を明かにしてゆくことによつて、フライトン等にたいしてまた本質的な批判を与えているのである(註二)。

(註一)「一八五四年六月八日にロンドンの個人銀行業者たちは、株式諸銀行を手形交換所の組織に参加させた。そして、その後まもなく、イングランド銀行での最終交換が設けられた。日々の決済は、種々の銀行がイングランド銀行にもつ勘定上の振替

によつて片づけられる。この制度の採用によつて、諸銀行が従来その相互的計算の決済に使用した多額の銀行券が不用となつた」（一八五八年の「銀行條例委員会」報告、別付五頁、三五六八頁より引用）。

（註二）ここでトックが『通貨原理の研究』（一八四四年）のなかでこの問題をいかに扱っているかを左に若干掲げておこう

（玉野井芳郎氏の譯書、日本評論社刊、世界古典文庫による、以下頁は同譯書の頁、また以下の傍点はトックのもの）。

トックはその第八章においてイングランドの地方銀行業者スタッキーが一八一九年の「地金委員会」で行つた証言を引用しているが、そのなかでの問答（八四頁）。——質問第四九一号（T・フレマントル卿）「貴下が農業者にたいしてなす前貸はそれが貴下自身の銀行券で支拂われると、イングランド銀行券または金で支拂われるとを問はず資本の前貸であるか？」答「さよう、前貸は一般にわれわれ自身の銀行券で農業者にたいしてなされる」。質問第四九二号「しかしもしも地方の状態が貴下の銀行券発行高の増加を必要としない状態にあるならば、貴下は、その銀行券が短期間に貴下に復帰すると確信するか？」答「まったくそうである」。質問第四九三号「したがってその場合に貴下のなす前貸は資本の前貸であつて、たんなる銀行券の前貸（an advance of mere issue）ではないのか？」答「まったくそうである、それは資産のなからなされる」。

トックは「だがスコットランドの銀行制度を考究すれば、……資本と通貨との區別についてさらに多く明らかにされるのである」（八九頁）と。そして第九章において一八四一年の「委員会」でスコットランドの銀行業者の証言を引用している。——その「直接の目的」の一つは「かれらが前貸をする場合にはそれはかれらの資本または預金者の資本からであつてかれらの銀行券流通高にはならぬ直接影響するものではないことを証明することにある」（九二頁）。そこに引用されているグラスゴウ・ユニオン・バンキング・カンパニーの支配人アンダーソンとの問答のなかから（九八一—一〇四頁）。——質問第二三二四号（委員長）「銀行券流通は、貴下がたんに顧客の需要に應じることによつて充分調節されると考えるか？」答「そう考える」。質問第二三三五号「貴下が貸付と前貸とを抑える結果、貴下の銀行券流通高にならぬ影響を生じると考えるか？」答「わが銀行券の額には、なんら直接の影響を生じない」。質問第二三三六号「それは終局的に生じるか？」答「銀行券の流通高は逼迫によつて終局的に影響される。賃銀が低く、人々が失業している場合には、その間に流通する貨幣の分量はすくなく、銀行券の流通は減退するが、逼迫の直接の結果は銀行券流通を減退することにはならない」。質問第二三三七号「では起つた銀行券流通の減退は公衆の側の需要が小となることから生じるのであつて、銀行の側の警戒が大となる結果として、生じるものではないか？」答「まったくそのとおりである」。質問第二三三八号（グロオト氏）「しかし貴下の述べた諸

結果は、かかる時期における、貴下の銀行券にたいする公衆の側の需要の増加を意味するか？」答「それは貨幣にたいする需要の増加ではあるが(註)、銀行券にたいする需要の増加ではない」。(註) 證人が貨幣をもって、銀行券と區別した資本を意味しているのはまったく明らかである。

……質問第二三四八号(グロト氏)「グラスゴウの顧客たちによって貴下に増加せる需要が求められる場合、貴下は貴下の地方的銀行券によってこれらの需要に應じないか？ またロンドン宛の為替手形によって應じないのか？」答「たしかにそうである。火曜日から金曜日まで、また金曜日から火曜日までのわれわれの銀行券はかかるさいに増加するが、しかしわれわれはその銀行券を計算に出来ない、なぜかというに、それがただちにわれわれに復帰するはずであること、またそれは銀行券の前貸ではなくて資本の前貸であることをわれわれは知っているからである。それはつぎの交換日には資本の前貸となる」……質問第二三六一号「貴下は、種々の質問によって言及されたところの、特別な時期の前貸額の増大により、貴下から借受ける人たちのもっている財貨購入の手段を追加しないか？」答「いや、追加する」質問第二三六二号「またそれは事実上、貴下の貸付の生じた地方における銀行券のそれだけの増加と同じではないか？」答「私は銀行券の増加とは考えない。それが資本だと考える。われわれが拂い出す銀行券は購買をするために数日間乃至数週間もどまっていけないから、それはただちにある他の銀行に交換われ交換によってわれわれに還ってくる。そしてこの銀行券は、われわれによって関係者への資本の前貸となり、したがって関係者は自己の購買をなすことができる」……質問第二三六三号「しかしたとい局部的にはそれが貴下の資本からの前貸となるとしても、一定の時間は、貴下の資本の援助なしに貴下の銀行券のみによってなされた前貸であるか？」答「二三日間はそうである」質問第二三六四号「場合による長短はあっても、一定時間そうか？」答「これらの特別な前貸にかんしてはつぎの交換日までよりも長いことはありえないと思う」……

質問第二三六九号(ジェームズ・グラハム卿)「預金の形式であるうと、当座預金の貸方であろうと、銀行への拂込みにはずべて日々利子がつくかぎり、また預金勘定にもとづく操作にはなんら手数料が徴されなにかぎり、そしてまたスコットランドで貨幣を受取る人々の大部分が銀行業者を利用してはなからなかり、地方銀行券でなされるすべての交換は二十四時間以内にはほとんどただちにある銀行業者の手にはいることにはならないか？」答「そうなると思う」質問第二三七〇号(グロト氏)「その命題の帰結は、もしこれをよくつきとめてみるならば、公衆の手にはいかなる銀行券もなく、それぞれの銀行によって発行された銀行券は一切、他の銀行の手に事実上あるであろうということにはならないだろうか？」(アンダーソンが前貸

の増加によって銀行券流通が増大することにはならぬということを強調せんとするあまりすべて資本の前貸となると答えているのにたいする「矢―三宅」答「それは結果である。非常に小額ではあるが、三百万ポンドの銀行券が外にある。人々は自分たちのポケットまたは家庭にある函に一定額の貨幣をもっていなければならぬ。小売商人たちは日々の仕事の受取額として一定額の貨幣をかれの錢箱の中にもっていなければならぬ。また製造業者たちは人々の賃銀を支拂うために銀行券をもっていなければならぬ等々。……」

かくしてトウツクはいう、「これらの非常に聰明な証人たちによってきわめて明瞭に示された通貨と資本との区別は、たんなる分類の問題や言葉の上での批評ではない。一方を他方と混同することは、諸銀行の経営または調節にかんする諸問題における、理論上の誤謬ならびに實際的応用上の過誤を生み出す源である（六一〇五頁）と。まことになかならず營業上重要であって、それゆえにこそ当時地方銀行業者たちによって右のように力説されていたわけなのである。

九

前号においてもまた本号でもこれまでのところ、金の流出、つまり金が輸出のため需要される場合については、度外視したまたはかんとんに触れておくにとどめておいた。そこで、いまこの場合について若干しるしておこう。

右で見て来たところの、「Aにたいする銀行の前貸は、どの範囲で資本の前貸と看なされ、またどの範囲で支拂手段のたんなる前貸と看なされるべきであるか？」という問題において、前貸にあたって金が求められる場合には、銀行にとつて——という意味において——資本を前貸するのであることは明かである。だがこういった限定においてでなく、このことと區別せずに、ここで求められ前貸されるものは資本であつて通貨ではない、というならば、金での前貸が求められるのは通常外国に金を送るためであつて（また退職されるさいにあつても）国内流通のためではないから、求められるものは通貨でないこと、金と通貨とを同一視する通貨主義者たちのいうように（国内的）通貨の問題でない

ことはたしかであるが、そして求められるものは現実の価値物としての貨幣であるが、といって勝手に資本であるとかんたんにいうことはできない。需要はまさに、外国市場がイギリス製の実現されえない商品資本をもって充滿している瞬間に生じることから明かなように、「要求されるのは資本としての資本ではなくて、貨幣——一般的な世界市場商品たる形態での貨幣——としての資本である」(Ⅲ四九四頁、傍點原文のまま)。すなわち、求められるものは、商品の形態での資本ではなく、貨幣の——現実の貨幣としての——形態での資本である。

ところで、前貸需要が殺到する「かかる逼迫期に欠けているのはなんであるか？ 資本であるか、それとも、支拂手段としての規定性における貨幣であるか？」という問題にたいして答えるためには、かかる時期に事業家が銀行に前貸を求めるのは資本として機能せしめるためではなく、債務弁済のために支拂手段として使用するためであると答へ、且つこの前貸が等価物とひきかえにまたはこれを担保として求められた場合にはかれは貨幣形態を、つまり貨幣を入手するにすぎないが、なんらの等価物なしにこの前貸が求められた場合には貨幣資本を入手することになると答へなければならぬ、ということを見えておいた。いま、金が求められ流出するのは、支拂手段としてであるが、しかし「国際的支拂手段としての規定性における貨幣」(Ⅲ五〇二—三頁)が、現実の価値物としての貨幣が求められるのであるから、これに不足することは資本の不足——とはいえ(現実の)貨幣の形態での——にほかならない。つまり資本にたいする需要であるか支拂手段にたいする需要であるかという対立はこの場合は存在しなく、この場合に存在する対立は貨幣の形態における資本と商品の形態における資本との間に存するということになるのである(註)。

(註) マルクスは一八五七—五九年の原稿——『経済学批判』の準備的労作——のなかのさきにも引用したダリモンを論評しているところでも、つぎのように述べている。——「イギリスの経済学者は、ある区別をつけて、困難を解決しようとしてくわだて

いわゆる「貨幣の前貸と資本の前貸」の問題について(承前)

ている。こうした貨幣恐慌の瞬間に求められるものは——とかれらはいふ——貨幣としての金や銀、鑄貨としての金や銀ではなくて、資本としての金や銀なのである。資本、だが金や銀という、一定の形態においてのみ、資本、とつけ加えることをかれらは忘れてゐる。さもなければ、資本がどんな形態においても輸出できるときに、金銀以外の大部分の商品は十分にさげないために減価するのに、まさにこの金や銀という商品はどこにさげるのであるか？」（邦譯、マルクス・エンゲルス選集、第九卷下、三〇二—三頁、傍點—三宅）。

なお、この金流出については、マルクスのつぎの記述——一部はすでに掲げたが——を見られたい。——「危機にさいして金屬的基礎を維持するためには現実的富のいかに大きな犠牲をも必要とするといふことは、トックスによつてもロイド・オーヴァーストーンによつても同様に認められている。争いはただ、プラスかマイナスかといふこと、および、この不可避的なことの取扱いにおける合理性の多少をめぐつてのものにすぎない（註）。總生産とくらべればとるに足りないある特定量の金屬が制度の軸点として認められている。……啓蒙された經濟學は、それが職掌的に「資本」を取扱ふかぎりには、金銀をば最大の輕蔑をもつて、資本の事実上もつともどうでもよい且つもつとも無用な形態であるかのように見くださす。ところが銀行制度を取扱ふとなると、一切が逆転して、金銀は、その維持のためには資本および労働の他の形態はいずれも犠牲に供されねばならぬところの資本それ自体（das Kapital par excellence）となる。……信用がゆらぐやいなや——そしてかかる段階は近代の産業の循環においてつねに必然的に生じる——、いまや、あらゆる現実的富が現実かつ突然に貨幣すなわち金銀に転形されねばならぬのであって、これは變てこな、といつても制度そのものから必然的に生じるところの、要求である。……かくして金流出の作用中には、生産は現実には社会的生産として社会的統制を受けていないといふ事情が、富の社会的形態は富の外にある物として実存するといふ形態で、きわめて明確にあらわれる。このことは事實上、資本主義制度と、それ以前の生産諸制度——これらが

商品取引と私的交換とに立脚しているかぎりでは——とに共通している。だがそれは、はじめて資本主義制度のもとで、もっとも明確に、かつ不合理な矛盾と背理とのきわめて怪奇な形態で、あらわれる」(Ⅲ六二〇—一頁、傍點原文のまじり)。

(註) マルクスはここで、一八四七年十二月十一日附『エノノミスト』誌からのつぎのような引用を入れている。「つまり実際には、トゥックもロイドもともに、金にたいする過大な需要にたいしては、利子率の引上げと資本の前貸の縮少とによって信用を早めに制限して対処するというのである。ただロイドの方は、かれの幻想によって、煩雑な、危険でさえもある(法律上の) 諸制限と諸統制とをもたらしただけである」。

ここで一つの挿話を挿んでおこう。

マルクスは一八五一年二月三日附エンゲルス宛の手紙(註一)で、ロイド、オーヴァストーン)等の通貨主義について、純粹な金属流通を前提とした一説例(Illustration)を記し、エンゲルスの返事を求めた。エンゲルスはこれにたいして二月二十五日附の手紙で返事を送り(註二)、「事柄自体は、わたしの見るところでは、まったく正しい。そして誤った通貨主義をかんとん明瞭な基礎的事実の上にひき戻すのに、大いに貢献するであろう」とするとともに、若干の点について批評を与えている。いまここで挿話というのは、この返事のなかでエンゲルスがつぎのように述べていることである。——「逼迫が昂まるにつれて、資本の流通も商品の取引も停滞する。だが、ひとたび振出された手形は満期となり、支拂を要求される。だから、予備資本——預金——が動員されねばならない。——君も知ってのとおり通貨としてではなく、資本としてだ(Du verstehst, nicht qua currency, sondern qua capital)」。かくて逼迫に伴う地金のたんなる流出はそれ自体で、イングランド銀行をその過剰な地金から解放するのに十分なのだ」(傍點

いわゆる「貨幣の前貸と資本の前貸」の問題について(承前)

一三七〇。

マルクスはこの説例をもって、「純粹な金属通貨のもとにおいても、通貨の数量、その膨脹收縮は、貴金属の流入、貿易勘定の順逆、為替相場の順逆となんらの関係もない、——実際にはけつして生じないが、しかし理論的には規定しうるような極端な場合は別として——」（註三）ということを主張せんとしたのであった。ここでエンゲルスが批判しているのは、マルクスが、地金の輸出という「第二の場合」において、逼迫の当初を考察するさいに、最初にイングランド銀行が利子率を引下げ手形割引をふやすという想定をしている点である。マルクスとしては地金の流入という「第一の場合」による保有金の過大——不用資本の増加からの移行としてこの利子率の引下げを入れていたものと見られるが、しかしすでに逼迫のはじまりを前提としているのかかる想定を設けるのはおかしい。エンゲルスは「君は、過剰の地金四百万ポンドから免れるために、銀行をして割引率を引下げさせた。私は、銀行がこういうことをやる必要はないと思う。また私の記憶するかぎりでも、逼迫のはじめに割引率が引下げられたことは、いまだかつてなかった」として、逼迫はただちに預金の引出しをもたらすから、それだけで「銀行をその過剰な地金から解放するのに十分なのだ」と上掲のようにいつているのである。いうまでもなく、この注意は正当である。しかしここにかかる地金の流出を「君も知つてのとおり、通貨としてではなく、資本としてだ」と——しかも上掲のような文体で——記していることは、エンゲルスが当時、トック、フライトンと同じ見地に立っていたことをここから窺わしめることとなる。前掲のようにマルクスは一八五七—五九年の原稿で、「資本、だが金や銀という一定の形態においてのみの資本、とつけ加えることをかれらは忘れてゐる」とし、また一八六四—六五の原稿では、「かくして金の流出は、フライトンやトック等がいうようにたんなる資本の問題 (a mere question of capital) ではなくて、貨幣の問

題 (a question of money) —— *and* *not* 独自の機能における——である。それが通貨主義者たちの主張するとき国内的流通手段の問題ではないということだけは、けつして、フラートンその他の考えるように、それがたんなる資本の問題 (eine bloße question of capital) だということを証明するものではない。それは、¹⁾ 国際的支拂手段たる形態での貨幣の問題 (a question of money) である」(Ⅲ四九四頁) と述べられているのである。

(註一) この手紙については、櫛田民藏氏によって「通貨原理に関するマルクスの書簡」(『大原社会問題研究所雑誌』、第六卷第一號、昭和四年九月—櫛田民藏全集第二卷『價値及貨幣』、昭和十年、所收) という紹介文が書かれている。

(註二) 二月十日附エンゲルス宛の手紙でマルクスは「一体、君はこの前の私の手紙を受けとったのか？」と返事を催促している。エンゲルスは同月十二日附——と推定されている——手紙でつぎのようにいっている、「君の最近の経済学上の発見は、いま私がきわめて慎重に熟考しているところだ。今日はもうそれに携っている時間がないが、しかし事柄はまったく正しいように思われる。だが数字については冗談をいえない、だから問題を綿密に考えているのだ」。マルクスは同月二十三日附の手紙でさらに、「なお、私の計算が正しいかどうか、知らせてほしい」と催促している。自説についての返事を大へんほしがっていたことが窺われる。だが右の二十五日附の返事を受けとったことについては、とくに書いているところは見当らない。

(註三) ここでマルクスはつづけて、「トウツクはこれと同じ主張を述べている、だが私は、一八四三年から一八四七年までの間のかれの物産史において、なんらの証明も見出さなかった」と述べている。櫛田氏はここで、マルクスが、トウツクが自分と同じ主張を述べていると誤解しているものと解しておられるが、私にはこの「これと同じ主張」というのはすぐ前の「理論的には規定しうる」を受けているものではないかと思われる。行文上そう解されるときにも、トウツクも『通貨原理の研究』で見ると、やはりまず純粹な金属流通を仮定してそこで金の流出入が通貨の増減と関係なく生じることを説いて、通貨主義を批判しているのであるが(同書、第二章)、マルクスがここでやっている考察との間にはかなりの隔りがある、からである。

10

さてここで、エンゲルスが書入れⅠⅡにおいて与えている説明の検討に入ることとしよう。この検討において基準となるものは、マルクスがかく考えていたと解される見解であり、そしてこれについては前号において、マルクスが諸所で述べている説明がいかなることを説明しているものであるかを明かにしようとして試みておいたことのなかにすでに与えられている。したがってここでこの検討は比較的かんたんなものとなる。問題は上来考察して来たことがマルクスの見解の正しい解釈であるかどうかにあるのであって、それが不当であれば以下述べることも不当であり、そうでないとすれば以下述べることもそうでない、という関係にある（さきのマルクスの設問のエンゲルスによる受け取り方がまったく見当がはずれたものであるという点は別として）。

まずエンゲルスの書入れの中心部分から見よう。エンゲルスは、無担保貸付の場合、担保付貸付の場合、手形割引の場合とに分けて、つぎのように説明している。

第一に、「もし銀行が取引先にたいし、借入金 (eine Anleihe) をたんにその人的信用で、担保なしで承諾するならば、事態は明かである。かれは無条件に、一定の価値量の前貸を、かれが従来充用していた資本への追加として、入手する。かれはそれを貨幣形態で入手するのであり、かくして貨幣のみならず貨幣資本をも入手するのである」

（Ⅲ四六八頁、傍點原文のまま）と。

かかる場合に、前貸を受けた人は「一定の価値量の前貸を、かれが従来充用していた資本への追加として、入手する」ことになる、という説明は、つぎのような意味においては、いうまでもなく正しい。前号で見たように、マルク

スは、恐慌期に事業家たちが手に入れようと目ざすのはなにかという質問にたいするオーヴァーストーンの証言を批評しているところで——つまり、このエンゲルスの書入れのすぐ前のところで、——「かれら自身が総じてなんらの資本も持っていないとすれば、かれらは支拂手段と同時に、もちろん、資本をも入手する。けれど、かれらは等価物なしに価値を入手するからである」(Ⅲ四六七頁、傍點—三宅)と述べており、また、これも前号で見たように、「逼迫期には貸付資本にたいする需要は支拂手段にたいする需要であって、それ以上の何ものでもない……」(エンゲルスもここで(四六九—四七〇頁)「マルクスは要点において(in der Hauptsache)同じことを述べている」としてこれ以下を引用している)支拂手段にたいする需要は、商人や生産者たちが確かな担保物を提供しうるかぎりには、貨幣への転態可能性にたいするたんなる需要である。そうでないかぎり、つまり、支拂手段の前貸がかれらに貨幣形態を与えるばかりでなく、かれらに不足している支拂のための——形態のいかんを問わず——等価物を与えるかぎりには、支拂手段にたいする需要は貨幣資本にたいする需要である」(Ⅲ五六一頁、傍點—三宅)と述べている。そしてエンゲルスが「かくして貨幣のみならず貨幣資本をも入手する」といっているのが、そういう意味においてであれば、そのかぎりにおいて、マルクスの述べているところと一致している。だがエンゲルスが「一定の価値量の前貸を、かれが従来充用していた資本への追加として、入手する」といっているとき、つぎに見るように、それは右のような限定のもとでいわれているのではないように見受けられるのである。

すなわち、エンゲルスは、「われわれはなお第二十八章で、もう一度この論題に立ちかえる」としているその第二十八章での書入れ、つまり書入れⅡにおいて、同じことをつぎのように説明している。「第一の場合。——Aが、銀行から前貸金をその人的信用で、なんらの担保(Deckung)も提供することなしに、受けとる。この場合にはかれ

いわゆる「貨幣の前貸と資本の前貸」の問題について（承前）

七六

は、支拂手段を前貸されるばかりでなく、無条件にあらたな資本——これをかれは、返済するまで、かれの事業において追加資本として使用し、増殖することができる（*verwenden und verwerten kann*）——を前貸される」（III 四九七—八頁、傍點—三宅）と。

まず、ここでとくに「増殖することができる」という説明をしていることは、ここでエンゲルスが「あらたな資本」を入手するとしているこの「資本」は——したがってまた書入れIで追加資本を入手するとしていた「資本」は——、たんに「等価物なしに価値を入手する」（マルクス）という意味での資本であるにとどまらず、その貨幣が剰余価値を生産する乃至その生産を促進するときその貨幣は資本として機能している、という意味での資本の意味においても用いられているのではなからうか、という疑問を生ぜしめる。さきに挙げた文中でマルクスが「かれらは支拂手段と同時にもちろん資本をも入手する」と述べているさいには、この「資本」は、——前号において見たように——右の後者の意味で用いられているのではまったくない。これは、恐慌期に事業家たちによって求められるのは資本であるか法貨であるかという委員の間にたいして「資本」であると答えているオーヴァストーンの証言を批評して、否、満期手形にたいする支拂手段を入手することであるとし——つまり右の後者の意味での資本ではないとし——、その上に立って、しかし無担保で貸付を受けるときは、同時に資本をも入手する、「かれらは支拂手段と同時にもちろん資本をも入手する」と述べているのである。すなわち、入手する「資本」とは、右の前者の意味での資本、つまり従来かれらの手に存する資本にたいしてあらたに追加される資本というだけの意味での資本、たとえば手形の割引によつては資本額の追加とはならないという意味での資本、なのである。エンゲルスによつても引用されているさきのマルクスの説明も、前掲のようにその前に、「逼迫期には、貸付資本にたいする需要は支拂手段にたいする需要で

あって、それ以上の何ものでもない」という句が入っているのであって、——エンゲルスはこれを切り離してその後の方にづくところだけを引用しているのであるが——、そこでいっている「支拂手段にたいする需要は貨幣資本にたいする需要である」の「貨幣資本」も、右と同様な意味での資本なのである。

右の、従来かれの手に存する資本にたいしてあらたに追加される資本というだけの意味での資本、かかる追加資本を入手することによって事業家はこれを「増殖することができる」ことはもちろんである。だが、銀行の取引先が担保なしで前貸を求めると、求めるものは支拂手段であって、この入手した貨幣を資本として機能せしめるためでない場合もある。だから、前貸が無担保であるならば借手は資本を入手するというさい、この資本の意味は従来かれの手に存する資本にたいしてあらたに追加される資本というだけの意味に嚴に限定されねばならないのである。前掲のエンゲルスの書入れIIでの説明は、この点において明確さを欠き、前記のように疑問を生ぜしめるのであるが、つぎのエンゲルスの説明を見ると、どういふことになるであらうか。

すなわちこの書入れIIの末尾においてエンゲルスはつぎのように述べている。「現実の資本前貸が云々されるのは、かくして第一の場合だけである (Von wirklichem Kapitalvorschub kann also die Rede sein nur beim ersten Fall)。第二および第三の場合〔有価証券担保貸付の場合および手形割引の場合〕においては、たかだか、どの資本投下にさいしても人は『資本を前貸する』という意味においてにすぎない。この意味では銀行はAに貨幣資本を前貸する。だがAにとっては、それが貨幣資本であるのは、たかだか、それはかれの資本一般の一部分であるという意味においてである。そして〔und——ここでは、しかも、といったほどの意味で用いられている〕かれがそれを求め且つ使用するのは、とくに (speziell) 資本としてではなく、とくに支拂手段としてである。そうでないとすれば (Sonst

い、いわゆる「貨幣の前貸と資本の前貸」の問題について (承前)

——これはすぐ前の *Emp.* 以下を受けているのではなく、その前を受けているものであろう、支拂手段を調達するためのどんな普通の商品販売でも、資本前貸を受けるものと看なされねばならないであらう」（三四九九頁、傍點原文のまま、）
 内一三宅。

この説明にはいろいろの問題があるが、当面必要なことだけについていまいうと、第二および第三の場合において A が銀行から「貨幣資本」の前貸を受けるといふならば、A にとってはそれは借受けた貨幣が「かれの資本一般の一部」をなすという意味においてすぎない、とエンゲルスが云っているのは、第一の場合においてはこれに反して、「あらたな資本」を、たんにあらたに追加されるという意味でのあらたな資本を入手することになると見ているためにすぎないのであろうかともなお考えられるのであるが（註一）、だがついで、「そしてかれがそれを求め且つ使用するものは、とくに資本としてではなくて、とくに支拂手段としてである」と述べていることを見ると、第一の場合においてはこれに反して「とくに資本として」使用すべく求め、かつかく使用する「資本」を入手すると云っていることになる、と解される。そしてそれゆえにこそ、第一の場合を「現実の資本前貸」と云っているのであらうかと解されるのである。かくて、このエンゲルスの説明を見ると、さきにあつては疑問の形であつたものが、ほぼたしかな形をとることとなる。そしていづれにしてもかかる不明確さ乃至誤りは、資本の前貸か貨幣の前貸かという問題にたいしては、前号で述べたように、考察が二重の視点からなされねばならないのに、エンゲルスはこれを一面的に考察して、右のことに気がつかないで、——答を出そうとしているために生じているといわれなければならない（註二）。

（註一）文章に忠実に解すればこのエンゲルスの説明はつぎのように批判されねばならない。すなわち、前貸を無担保で受ける場合であつても、A にとって借受けた貨幣は「かれの資本一般の一部」をなすにすぎない、有価証券担保貸付または手形

割引のさいにはかかる「一部分」を貨幣形態で持つことになるのたいし、無担保のさいにはかかる「一部分」をあらたに入手することになるといふちがいがあただけである、と。

(註二) ところで、すぐ右に見たように、第一の場合においては、第二、第三の場合とことなり、「とくに資本として」使用するのであつて、支拂手段としてではない、とエンゲルスが云っているとすれば、前に、「この場合にはかれは、支拂手段を前貸されるばかりでなく、無条件にあらたな資本を前貸される」と書いてあるエンゲルス自身の説明と撞着することになる。エンゲルスが支離滅裂を犯しているのか、あるいは私がどこかで考えちがいをしているのか、どちらかであるといふほかない。

なお、この書入れⅡでエンゲルスが「A」といひまた「支拂手段」といつているのは、さきに見たように、マルクスがその前で前貸した銀行券がイングランド銀行にいかにして還流するかを説明しているさいに、Aはこの銀行券をもつてBにたいして満期手形を支拂い、Bは云々という説例を設け、「さて、Aにたいする銀行の前貸は、どの範圍で資本の前貸と看なされ、またどの範圍で支拂手段のたんなる前貸と看なされるべきであるか？」と問題を出していたのを受けたものである(はずなのである)。だが、これを受けたものとすると、この支拂手段というのは、さきに五二頁のところで註記しておいたように、一般的に問題を出すならば通貨と云うところなのである。そしてこの設問にはさきに見たような形の答を出してゆかなければならぬのであるがそのことは措くとしても、かくてこの設問で「支払手段」といつているのは、マルクスによる問題提起Ⅱ——「いつたい、かかる逼迫期に欠けているのはなんであるか？ 資本であるか、それとも、支拂手段としての規定性における貨幣であるか？」——で「支拂手段」といつているのは、同一でないのである。後の場合にはこの「支拂手段」は、まず、資本としての資本に對置して受取つて、逼迫期に求められるものは資本ではなく支拂手段だ、購買手段ではなく支拂手段だ、といった考察がなされるべきところなのである。すなわち、資本として使用される場合に對置されて、たんに債務返済に当てられるという限定された意味での支拂手段なのである。これにたいし、前の場合には一般的にいふならば通貨と云うところであり、また、いま問題をエンゲルスのように受取つて銀行の取引先の入手するものはなにか、無担保で前貸を受けるさいには云々というように考察するとしても、考察は借手の資本額への追加となるかならぬかという量についてなされているのであるから、そして無担保で前貸を受けるさいには云々と一般的にいふときには借手はその貨幣を支拂手段として使用するばかりとはかぎらないから、書入れⅠのさいに「貨幣のみならず貨幣資本をも入手する」と書いていたように貨幣または通貨とした方が分

り易いところなのである。したがって、この書入れⅡの末尾で、突然に、「かれがそれを求め且つ使用するのは、とくに資本としてではなくて、とくに支拂手段としてである」といわれると、すくなからずとまどいさせられてしまうことになるのである。そしてまた、もしこちらを生かせば、第一の場合についても「とくに資本としてではなくて、とくに支拂手段としてである」といわねばならないこととなるから、「あらたな資本——これをかれは返済するまで、かれの事業において追加資本として使用し、増殖することができる——を前貸される」という前の説明とただちに撞着することになる。

しかし第二の場合を見よう。

第二にエンゲルスはつぎのように述べている。「もしかれが前貸の供与を有価証券等々の担保と引かえに (*Gegen Verpfändung*) 受取るならば、それは返済を条件としてかれに貨幣が支拂われたのだという意味での前貸である。

だが資本の前貸ではない。けれど、有価証券は資本を、しかも前貸よりも多額のものゝ代表するからである。したがって、受取手は、自分が担保として提供するよりも (*als er in Pfand gibt*) 少額の資本価値しか入手しない。これは、かれにとっては、追加資本の獲得ではけつしてない。かれがこの取引をするのは、かれが資本を要するからではなく——資本はかれが有価証券として持っているのだ——、貨幣を要するからである (*Er macht das Geschäft nicht, weil er Kapital braucht…… sondern weil er Geld braucht*)。かくして、この場合に行われるのは貨幣の前貸であるが、資本の前貸ではない」(Ⅲ四六八—九頁、傍點原文のまま)。

マルクスもまた商品または有価証券担保の貸付について、借手は資本を商品の形態または有価証券の形態ですでに持っているのであり、これを担保に入れて貸付を受けることによって、借手はこれを貨幣の形態に置換えることができるのである、ということを明かにしていたことは、すでに前号で見たとおりである。借手は貨幣形態を手に入れた

のであって、あらたに追加される資本を入手したのではない。たとえば第一の場合のところでも掲げておいたように、「支拂手段にたいする」(この(註)需要は、商人や生産者たちが確かな担保物を提供しうるかぎりには、貨幣への転態可能性にたいするたんなる需要である)として、「支拂手段の前貸がかれらに貨幣形態を与えるばかりでない無担保貸付のさいに支拂手段にたいするこの需要が「貨幣資本にたいする需要」であることと、対比している。

(註) *をき*に記してもよかつたのであるが、いまここで記しておく。マルクスは、「In Zeiten der Klemme ist die Nachfrage nach Leinkapital Nachfrage nach Zahlungsmittel und weiter gar nichts; keineswegs Nachfrage nach Geld als Kaufmittel. Die Nachfrage nach Zahlungsmitteln ist bloße Nachfrage nach Umsetzbarkeit in Geld, soweit.....; sie ist Nachfrage nach Geldkapital, soweit.....」と書いてゐる。「逼迫期には」の句を省いて引用したり考察したりするさいには、アンダーラインを附しておいたように、ここに定冠詞がついていることに十分な注意が拂われなくてはならない。エンゲルスはこのことを考慮していない。

エンゲルスがここで、「行われるのは貨幣の前貸であるが、資本の前貸ではない」といつているのは、右でマルクスが、行われるものが貨幣の形態への置換えであるとしてゐる点と一致してゐるものである。またここで、エンゲルスが「けだし」云々としてゐるのは、借手の手にすでに存する資本類にたいしてあらたに資本類が追加されることにはならない所以を——この書入れの前でのマルクスの評言はかんたんであるので——付け加えて懇切に説明してゐるものと見られる。

この場合に行われるのは「貨幣の前貸」である。しかしそれは右のような意味において「貨幣の前貸」なのであつて、たとえばマルクスが右に挙げたところで「支拂手段にたいするこの需要」はとか「支拂手段の前貸」がとか記してゐるものと同一なものでないことはただちに気付かれるであらう。すなわちここでマルクスが支拂手段の前貸とい

っているのは、すでにくり返し見たように、逼迫期において借手が求めるのは資本として使用するためではなくて支拂手段として使用するためだ、という意味で記しているのであって、借手が担保を持っているとかいえないということとは別の問題なのである。エンゲルスは考察のはじめに当って、「銀行の取引先はなにを要求し、かつなにを入手するか、ということが問題なのである」としていたのであるが、この有価証券担保で貸付を求めるさいにおいても、担保を提供しているから「貨幣の前貸」だとかんたんにいい切ってしまうことはできないのであって、資本として使用するべく貨幣形態への転態を求めている場合と、そうではなくたんにかれの消費のためとかたんに債務の支拂のために貨幣形態への転態を求めている場合とは、区別されねばならないのである。この視角から見ると、後の場合においては借手が求めていたのは資本ではなく、貨幣であるが、前の場合においては貸付けられた貨幣は借手にとって資本であるのである。つまり、エンゲルスはここでも、考察が二重の視角からなされねばならないことに気がついていないのである。

つぎに書入れⅡの方を見ると、つぎのように述べている。「第二の場合。——Aが銀行に有価証券、すなわち国債証券または株式を担保として提供し（*hat verpfändet*）これにたいしてたとえは時価の三分の二までの現金前貸を受けとる。この場合にはかれは所要の（*die er braucht*）支拂手段を受けとるが、しかし追加的資本を受けとるのではない。けだし、かれは、かれが銀行から受けとるよりも大きな資本価値を銀行の手に渡したのだから。だが、このより大きな資本価値は、一面では、それが利子を生むようにある一定の形態で投下されていたのでかれの当面の必要——支拂手段——には使用されなかつたのであり、他面、Aには、かれがこれを売って直接に支拂手段に換えなただけの理由があつたのである。かれの有価証券はなかんづく予備資本として機能すべき使命を持っていたのであ

て、またかかるものとしてかれはそれを機能させたのである。したがって、Aと銀行との間で、一時的な、相互的な資本移転 (eine zeitweilige, gegenseitige Kapitalübertragung) が行われたのであって、かくしてAはいかなる追加的資本をも受けとりはしなかった(逆だ!)が、しかし必要な支拂手段を受けとったのである。これに反し銀行にとっては、この取引は貨幣資本を借入金(の形態に (in Form einer Anleihe) 一時的に固定させることであり、貨幣資本を「形態から他の「形態に転形することであって、そしてこの転形こそはまさに銀行業務の本質的な (wesentlich) 機能なのである」(三四九八頁、傍點—三七)。

見られるように、書入れIIにおいても書入れIで見られたと同じことが説明されている。だが、ここで書入れIとくらべてあなたに——すくなくとも文章上では——つけ加わっているところの、つぎの点について見ておこう。

まず、ここでAが支拂手段を必要としていて、これを受けると述べている点について。これについてはすでに第一の場合のところで記しておいた。エンゲルスがこの書入れの末尾で第二、第三の場合においては、「かれがそれを「貨幣資本を「引用者」求め且つ使用するのは、とくに資本としてではなくて、とくに支拂手段としてである」と記しているのを考慮すると、この第二の場合においても入手した貨幣はたんに債務支拂のためではなく、資本として使用されるのであるから、エンゲルスがここで支拂手段としてゐるのは大へん奇妙なことであるといわれなければならぬ。

つぎに——これは附随的なことであるが——、ここでエンゲルスが、Aが追加資本を受けとったのではないということの説明するに当って、「Aと銀行との間で一時的な、相互的な資本移転が行われた」と述べている点について。云っているのは有価証券にたいする質権の設定である——verpfänden——から、質物である有価証券は債権者の手

に引渡され、占有の移転が行われなければならない（註）。質にもさまざまな形がありうるが、普通の形を採って見ると、この「資本価値」は、Aが期日に返済しなかったさいにはじめて——しかも利子を含めた前貸額の範囲で——銀行の手に帰するのであり、貸付の当初において、返済すれば請け戻しうるといった条件でその質物の所有権を質権者に取得せしめるものではない。したがって、ここで「資本移転」が行われたともいいうならば、占有が移転したという意味でそういいうることである。そしてエンゲルスはこの「資本移転」が「相互的」であるというのであるが、銀行も貨幣を前貸するに当って、その貨幣を手離すのであり、それが資本として機能するという使用価値をAに売ったのではあるが、しかしその貨幣自体の——その資本価値のといっても同じことである——法律上の所有権は譲渡していない。かくて、いまAと銀行との間で「相互的な資本移転」が行われたというとき、それをAの方でも銀行の方でも同じく占有を移転したという意味に解するならば、そういいうることであり、そういえないことではない。（註）したがって、前号で担保貸付について考察したところで、「従来の投下資本の一部である機械、設備、工場財団などを担保として貸付をえた場合」には「借手はあらたに追加される資本を入手したことになる」と記しておいたが（六二—三頁）、ここでエンゲルスが述べているのはこういってた抵当権設定の場合についてはないのである。

だがすぐつぎの第三の場合——手形割引の場合——について説明するさいに、エンゲルスはつぎのように述べているのであって、それと対比して見ると、問題が生じてくる。すなわち書入れ工においてエンゲルスはいう、「この場合、資本の前貸（Vorschub von Kapital）はぜんぜん問題にならなう。商人と商人との間の売買はいづれも資本の移転である。このさいが、資本の移転（die Uebertragung von Kapital）が相互的（wechselseitig）になく一方的（einseitig）になりかす後掛になり（auf Zeit）場合どかあり、前貸が生じる（Aber ein Vorschub kommt nur

da vor...)。だから、手形割引による資本前貸は、その手形が空手形である場合にのみ生じる」(Ⅲ四六九頁、傍點原文のまま)と。また書入れⅡにおいてつぎのようにいつている、「この場合にもAと銀行との間で相互的な資本移転 (gegenseitige Kapitalübertragung) が行われたのであって、しかもそれは他のあらゆる商品の売買とまったく同様であり、そしてだからこそAはなんらの追加的資本をも受けとらなかつたのである」(Ⅲ四九八頁)と。

「商人と商人との間の売買はいずれも資本の移転である」——この場合には明かに所有の移転の意味で用いられている。そして「この」資本の移転が相互的でなく一方的でありかつ後拂である場合にかぎり、前貸が生じる」とエンゲルスはいつている。だが、いまの、有価証券を担保として貨幣を手渡す場合、すなわちエンゲルスが「Aと銀行との間で一時的な、相互的な資本移転が行われた」といつている場合、においても、前貸が行われているのであって、エンゲルス自身も前掲のように、「もしかれが前貸の供与を有価証券等々の担保と引かえに受取るならば」とか「現金前貸を受けとる」とか述べているのである。したがって、さきの説明を右の書入れⅠと対比して見ると、「資本移転」という語が——まさにそれによって事態を明確に説明せんとしているそのことが——混乱をまねくように使われているように感じられる。このことは一つには「前貸」という語が混乱をまねくように用いられているということにも因るのであるが、すなわち、「資本の前貸」と「前貸」とがあるいは同一視されて、あるいは同一視されないで用いられているということにも因るのであるが——この点についてはのちにまた触れる——、そればかりでなくまた同時に、所有を移転する場合とたんに占有を移転する場合とを同じく「資本移転」という語でいい表わしている——エンゲルスは第三の場合について説明するさいには「所有」が移ることを強調して述べてきているのではあるが——ためでもある。そしてかつ、同じ語でいい表わされているだけでなく、区別して考えられていない。——書入れⅡにおいて

いわゆる「貨幣の前貸と資本の前貸」の問題について(承前)

も「この場合にも (auch hier) Aと銀行との間で相互的な資本移転が行われた」と述べているのである。すぐ前でも「相互的」といっているのは占有の移転の意味にしか解しえないが、ここでいっているのは所有の移転なのである。

Aは資本をたとえば有価証券の形態で持っていたが、貨幣形態であることが必要なのでこれを担保に入れて「現金前貸」を受けた。この取引は、Aにとって、この貸付によって有価証券の形態にある資本を貨幣形態に置換えることをえせしめたものである。この場合のこの置換えは貸付によって行われたものであって、売却によってではない。要するにこういうことなのであって、エンゲルスが右のように説明したのは、これを、占有の移転にせよ所有の移転にせよ、いずれにしても価値の「相互的」な移転が行われるのであって、担保貸付のさいにはその移転が「一時的」であり、手形割引のさいは売買と同じ移転なのだ、として記したのである。そしてこれによって、Aが追加資本を受けとったのではないという点を明かにしようとしたのである、と考えられる。しかし、Aが担保として渡した有価証券の「移転」と、銀行からAへ貨幣が移転された「移転」とを「相互的」な「移転」とすることは、銀行からAへ貸付が行われている——すなわちAははまだ等価を支拂っているのではない——という事態を不明確にし、かつまた、占有の移転にせよ所有の移転にせよいずれにしても *Uebertagung* にはちがいはないのであるが、担保付貸付を「相互的」な「移転」——たとい「一時的」にせよ——とすることは、この有価証券を銀行に売って代金を受取ったという事態との差異を不明確にするおそれがある、と考えられる。すなわち、これによって、第一の場合と第二の場合との差異ははっきりするが、第一の場合と第二の場合との貸付という点での同一性が不明確となり、また第二の場合と第三の場合との差異が不明確になるおそれがある——したがって上掲のところにも見られるように第三の場合を「他のあらゆる商品の売買とまったく同様」であるというような説明がなされることにもなる——。そして第一の場合

合と第二の場合との差異は、つまりAは追加資本を受けとらないう点は、Aは有価証券という価値物を持っており、これを担保に入れて貨幣の前貸を受けとるのであるから、Aにとって生じることが資本の形態の置換えである、と云うことだけで説明がつかぬのではないかと考えられるのである。エンゲルスの説明の欠陥と考えられるものとしては附随的なものにすぎないが、エンゲルスの説明としては一要点であるので、やや煩わしく考察しておいた次第である。

つぎに、右と関連して、すぐつぎでエンゲルスが、「これに反し銀行にとっては、この取引は貨幣資本を借入金(註)の形態に一時的に固定させることであり、貨幣資本を一形態から他の一形態に転形することであって、そしてこの転形こそは銀行業務の本質的な機能なのである(Dagegen für die Bank war das Geschäft eine zeitweilige Festlegung von Geldkapital in Form einer Anleihe, eine Verwandlung von Geldkapital aus einer Form in eine andre, und diese Verwandlung ist gerade die wesentliche Funktion des Bankgeschäft)」と説明している点にしよう。

(註) anleihen は verleihen (貸付ける) にたいして、借手の方から見た借受けることを指す。たとえば、「この運動——返還を条件とする手離し——は総じて、貸付および借受 (Verleihen und Anleihen) と云う、この、貨幣または商品の条件つき譲渡の独自の形態の運動である」(III三八一頁)。したがって Anleihe は借入金で貸付金と訳すことはできない。しかし、これを貸手の方から見れば貸付金にちがいない。そして貸付金と訳しておいた方がここでは意味がとり易いであろう。

見られるように、銀行にとってはこの取引は「貨幣資本を借入金(貸付金)の形態に一時的に固定させること」であるとして、ロミイで切つ切つして、「貨幣資本を一形態から他の一形態に転形すること」であるとしているのである。

いわゆる「貨幣の前貸」と資本の前貸」の問題について(承前)

が、この「転形」を、貸付可能な貨幣資本の形態から貸付金——借手の債務証書——の形態への転形と解するならば、つぎで「この転形こそは銀行業務の本質的機能なのである」といつていることがあまり意味をなさぬものとなる。これだけのことであれば、要するに銀行は貸付可能な貨幣資本を貸付資本として投下するといったこと以上のことを述べているものではないとしか解しえなく、したがってとくに「本質的機能」なのであるとここで説明するほどのこともないと考えられるからである。おそらくこの「転形」はさきの「相互的な資本移転」と関連しているものであって、貸付可能な貨幣資本の形態から有価証券の形態への「転形」——あるいは有価証券の形態から貨幣形態への「転形」——という意味であろうと思われるが、そうすると、「借入金〔貸付金〕の形態」に固定させるといつていることと齟齬を来たすことになり、また、さきの「相互的な資本移転」についてと同じく、有価証券を買ったのではないからこれに転形したと見るのは行きすぎているといわれなければならない。形式論理的に考察することは避けねばならないのであるが、しかしエンゲルスのごういふ説明は、明確化を図ったのではあるうがかえって不明確さをもたらすこととなっている、と感じられるのである。

つぎに第三の場合を見よう。

第三にエンゲルスはつぎのように述べている。「前貸が手形の割引と引かえに与えられるとすれば、前貸の形態、またで消滅する。行われるのは、純粹な売買 (ein reiner Kauf und Verkauf) である。手形は裏書によって銀行の所有に移され (übergeht in das Eigentum der Bank) くれたらして貨幣が取引先の所有に (ins Eigentum des Kunden) 移される、そしてこの取引先側の返済は問題にならない。取引先が手形または類似の信用用具をもって現

金を買うとすれば、それが前貸であるのは、かれがかれのそのほかの商品——棉花、鉄、穀物——をもつてその現金を買う場合以上でも以下でもない。そしてこの場合、資本の前貸はぜんぜん問題になりえない。商人と商人との間の売買はいずれも資本の移転である。ところが、資本の移転が相互的でなく一方的でありかつ後拂である場合にかぎり、前貸が生じる。だから、手形割引による資本前貸は、その手形が空手形——すなわち、ぜんぜんならの売却商品も代表しない、その正体が分ればどの銀行業者も受けとらない、手形——である場合にのみ生じる。だから、正規の割引業務では、銀行の取引先は資本でも貨幣でも前貸を受けるのではなく、売った商品の代りに貨幣を受けとるのである」(Ⅲ四六九頁、傍點原文のまま)。

ここでエンゲルスは「前貸の形態まで消滅する」と説明しているが、手形の割引によって銀行は、割引依頼人が手形の支拂人にたいして持っている債権を取得するのであるから、銀行は手形の支拂人にたいして支拂期日まで前貸をしていることになる。手形の割引を求めることは貸付資本にたいする需要であり、銀行は貨幣を利子生み資本として投下するのである。だが、エンゲルスがいつていることは、銀行と割引依頼人との間の關係を、しかも「銀行の取引先の立場に立って」見ているのであって、そこにおける手形割引という取引は前貸ではなく売買だ、と説明しているのである。したがって右のこととの間に矛盾はないのである。すなわちエンゲルスのこの説明は、マルクスがたとえば、「ところがいまや、この商業信用に、本来の貨幣信用がつけ加わる。産業者や商人たち相互間の前貸は、かれらにたいする銀行業者や貨幣貸付業者たちの側からの貨幣の前貸と混和する」(Ⅲ五二八頁、傍點—三宅)といっていることと、あるいはまた、「貨幣の貸手にとっては、これらの手形は利子生み証券である」(Ⅲ五一三頁)といっていることと、なんら矛盾するものではないのである。

ただここで、「純粹な」売買であると説明しているのは、エンゲルスとしては前貸ではないという点を強調したものとと思われるが、手形割引は普通の商品の売買と同じではなく、割引依頼人としては支拂人にたいして与えているその私的な信用を銀行に肩代りしてもらい、そして不渡になれば遡及を受ける。したがってそこには信用關係が入っているのであるから、この説明はやや単純化しすぎているように感じられる。マルクスもたとえば、既出のように、事業家が手形を割引に附するのは「自分が与える信用を、受ける信用によって相殺するためである」（Ⅲ四六五頁、傍點—三宅）といっている。前号で記しておいたように（五〇頁）、手形の割引が、商品を販売して貨幣、現金を取得した場合とまったく同様であるのは、手形の割引において生じることが資本の持っている形態の変化だけであってすでにかれの手に存する資本にたいしてあらたに資本が追加されるものではない、という点なのであって、他の諸点においては差異があるのである。しかしこの点においては他の普通の商品の売買とことなるところはない。

つぎに書入れⅡの方の説明を掲げておく。——「Aが銀行で手形を割引に附し、割引料を控除した額を代り金として現金で受けとった。この場合にはかれは、非流動的な形態の貨幣資本を銀行に売って、流動的な形態での価値額を得たのである。すなわち、まだ期日の来いとならぬ（noch laufend）手形を売って現金を得たのである。手形はいまや銀行が所有（Eigentum）している。このことは、支拂が行われなかつたさいには最後の裏書人たるAがその額を銀行に保証する、ということによってはなんら変化しない。この保証責任をかれは他の裏書人たちおよび振出人と分担するのであって、これらの人々にたいしてかれとしては求償権をもつのである。かくしてこの場合に行われるのは、ぜんぜんなんらの前貸でもなく、まったく普通の売買（ein ganz gewöhnlicher Kauf und Verkauf）である。だからAは銀行にたいしてなにもをも返済する要がなく、銀行は期日に手形を取立てて支拂を受ける。この場合に

もAと銀行との間で相互的な資本移転が行われたのであって、しかもそれは他のあらゆる商品の売買とまったく同様であり、そしてだからこそAはなんらの追加的資本をも受けとらなかつたのである。かれが必要とし且つ受けとつたものは (was er brauchte und erhielt) 支拂手段であつた。そしてかれはそれを、銀行がかれにたいしてかれの貨幣資本の一形態——手形——を他の形態——貨幣——に転形したことによって、受けとつたのである」(Ⅲ四九八—一九頁)。

書入れ工と同じく、エンゲルスがここで「まったく普通の売買である」、「他のあらゆる商品の売買とまったく同様」といつているのは、前貸でないということを強調するあまりやや單純化しすぎていると考えられる。

なおこの書入れ工の末尾でエンゲルスは、「もの識りであるはずのチャブマン氏も、割引業務にかんする上述の見解を確認している」として、一八五七年の銀行委員会における質問番号第一三九号でのつぎのような証言を引用している、——「その銀行業者は手形を持つのです。その銀行業者は手形を買つたのです」(Ⅲ四七〇頁)(註)。

(註) このオヴァレンド・ガーニー商会のチャブマンにたいする一連の質問応答については、第三十三章「信用制度下の流通手段」のところでマルクスによってかなり詳しい抜き書きがなされているが、そこでもこの第一三九号のところでエンゲルスは、「かくしてチャブマンもまた、手形の割引を前貸とは見ないで、商品の購買と見るのである」という書入れを挿んでいる。(Ⅲ五七九頁)。

いかにもチャブマンはそこで銀行業者は手形を「買った」のですといつている。しかしどういつた関連においてこのチャブマンの言葉が出ているかをなお見て見よう。ここでの質問応答は、イギリスの商人が商品を輸出するさいの輸出金融をめぐる行われているのであって、この第五二三九号では、輸出手形の割引について、「銀行業者の方は

いわゆる「貨幣の前貸と資本の前貸」の問題について(承前)

貨幣を前貸しなければならぬでしよう？」という質問にたいして「銀行業者は手形を買ったのです」と答えているものなのである。質問者は、製造業者乃至輸出商人は商品が売れるまで長期に自分の資本を投下していなくともすむとはいえ、その代りこの輸出手形を割引く銀行業者の方で前貸することになるのではないか、だからいずれにしてもイギリスで前貸がなされるのであり、割引のさいにはしたがってロンドンの金融市場にたいする需要が増大する、といったことを考えているのである。銀行は手形を買うのではあるが、しかし右のような意味では、同時に、前貸をしてゐるにほかならぬ（註）。

（註）ギルバートは、“The drawer of a bill on a person residing out of the country sells it on the exchange. Foreign bills are never said to be *discounted*, but to be *sold*.”と述べてゐる（“The History, Principles and Practice of Banking”, vol. 1, 1922 p. 152. イタリッは原文のもの）。わが国においても、輸出手形についてはつねに売る銀行はこれを買う、とさうように呼ばれていることは周知のごとくである。しかしギルバートが右につけて“for a person who gives the drawer the amount, is supposed to deduct not only the interest on the bill, but also the expense of its transmission”と述べてゐるのはすこしいかがなものかと思われる。

ここでロンドンにいわゆる割引市場について一言つけ加えておく。——イギリスにおいては、銀行が直接に取引先の手形を割引くほか、ビル・ブローカー乃至デイスカウント・ハウスが構成している割引市場が発達して、世界各地からロンドンに送られて来てここでアクセプタンスされた多くの貿易手形がこの割引市場で売買されていたのであって、銀行は一般に手形を扱うにはこのブローカーを通じて買っていた。「銀行で割引される手形をビル・ブローカーがギャランティーする。……それは一枚々々に裏書して保証するのではなく其持込んだ多くのビルスに対してブローカーが責任を負うと云う据置的の契約をするのであります。若し其幾多の手形の中でどの一枚でも期日に至り支拂不能のものがあればブローカーがそれを引取るのである。……ランニング・ブローカーのような者や出来すまいが、デイスカウント・ハウスと云う堂々たる専門業者がやつて居るので銀行も安心出来る。尤も銀行も只ブローカーのみに一任するような無責任ではなくて自己の判断でブローカー

持参の一束の中から取捨するのであります」(井上辰九郎講述『英国の金融組織と英蘭銀行の機能』、一三三—三四頁、金融研究会講演集第三編、昭和五年)。かかる発達した割引市場におけるアクセプタンス・ビルの取引のさいは、売買という語がまたいかにもふさわしい語であるであろう。前貸でなく売買だというのは、銀行と割引依頼人との間の取引の性質規定の問題ではあるが。

ところで、前貸ではなく売買だというエンゲルスの説明は、表現においてやや単純化しすぎている感があるとはいへ、またその引証においてやや適切を欠いているとはいへ、基本的には正当であるといえるのであるが(註)、欠陥の根本問題はそこにあるのではなく、この割引の場合においてもさきの二重の視点が欠けていることにある。エンゲルスはいう、「Aはなんらの追加的資本をも受けとらなかつたのである。かれが必要とし且つ受けとつたものは、支拂手段であつた」、また、第二、第三の場合について「かれがそれを求め且つ使用するのは、とくに資本としてではなくて、とくに支拂手段としてである」と。このことについてはすでに第一および第二の場合のところで述べたからくり返さなう。

(註) エンゲルスが手形の割引は売買だ、依頼人が受けとる貨幣は代金だと述べていることは上に見たごとくであるが、他方、書入れⅢの末尾で「第二および第三の場合においては、たかだか、どの資本投下にさいしても人は『資本を前貸する』という意味においてにすぎない。この意味では銀行はAに貨幣資本を前貸する(既出)と述べている。第二の場合においては正しいが、第三の場合に、銀行はAに貨幣資本を前貸する、と見ることは、その前貸という語が右のような意味で用いられていても、納得がゆかない。

以上エンゲルスが書入れⅠとⅡにおいて、無担保貸付の場合、担保付貸付の場合、手形割引の場合についてそれぞれ

いわゆる「貨幣の前貸と資本の前貸」の問題について(承前)

れ与えている説明を検討して来た。これをきわめてかんとんに要約すると、エンゲルスの説明は、説明本文中の誤りを含む夾雑物を度外視して筋を通して見ると、従来借手の手に存する資本にたいしてあらたに資本額が追加されることになるかどうかという視点から行った考察としては、基本的には正当であるといえる。と同時に、なざるべき二重の視点を欠いているという大きな欠陥を持っているといわれなければならないのである。ここでいま一つ、角度をすこし移して、エンゲルスが「前貸」ということをいかに扱っているかについてやや立入って検討しておこう。

前号においてオーヴァーストーンの証言について見た最初のところで、つぎのように記しておいた。——「ここでも、オーヴァーストーンが『もっと大きな資本を支配したい』と云っているこの『もっと大きな資本』とはいかなる意味での資本であるか、と問われねばならないであろう。かれは事業家がこれの入手を求めるのはそうすると『儲かる』からであると云う。したがって、それは現実に産業資本乃至商業資本として利潤をもたらすべく使用されるという意味での資本と解されねばならない。こうした資本が手形を割引に附することによって割引依頼人の手にあらたにその額だけ追加されることになる、とかれは云っているわけである。そこで批判は二通りになさねばならない。第一に、手形の割引によっては、事業家はすでにかれの手に存する資本額にたいしてあらたに資本額が追加されることにはけっしてならない、ということである。そして第二には、手形の割引によって事業家が入手した貨幣は、かならずしも利潤をもたらすべく使用されるとはかぎらない、ということである。批判がかく二通りになさねばならぬということ、以下銘記しておかれなければならない（四一頁）。

しかしエンゲルスは、書入れIの冒頭において、「ノーマンにあってはロイド・オーヴァーストーンにあっては、銀行業者はつねに『資本を前貸する』者として存在し、その取引先は銀行業者から『資本』を要求する者として存在す

る」(Ⅲ四六七頁)として、オーヴァーストーンの諸証言を引用し、「なにが資本であるかということにかんするロイド・オーヴァーストーンのあらゆる混乱にもかかわらず、銀行業者が取引先に与えるものをかれが資本——これまで取引先が自由にしていたものになりたいする追加であるところの、これまで取引先が持っていなかった、かれに前貸された資本——と名づけていることだけは、明かにわかる」としている。銀行業者が取引先に与えるものをオーヴァーストーンが資本と名づけている、ということは明かなことであるが、見られるようにエンゲルスは、オーヴァーストーンがこの資本を、たんに、借手の手に存する資本額に追加することになるという意味で云っていると解しているのである。そして、以下で、これを批判するという見地から考察を行っているのである。このことから、二重の視点を欠くのは当然なのであって、最初から問題に上っていないのである。

ところでオーヴァーストーンがなぜ、銀行業者が取引先に与えるものを資本と名づけているかという点、同じく前号においてつぎのように記しておいた。——オーヴァーストーンは資本とは、オーヴァーストーンが自由にしているような資本、つまり銀行資本のことである、銀行資本——この場合いかえれば利子生み資本、貸付資本といっても同じである——だけが資本である、と考える。だから、かれの眼には、割引依頼人は手形の形態で資本を持っているのであるが、『資本のない男だ』と映じ、割引によってあらたに『資本を支配する』ことになると映じる」(五一頁)。また、「貸付資本の見地においては、支拂手段にたいする需要であろうとあるいは産業資本にたいする需要であろうと等しく貸付資本にたいする需要ということになるのであり、また割引の場合であっても、貸付資本にたいする需要にほかならない……。割引依頼人は手形を売って貨幣を取得するのであり、貨幣の貸付を受けるのではないが、貸付資本家としては貨幣を利子生み資本として投じるのである」(五六頁)。

い、いわゆる「貨幣の前貸と資本の前貸」の問題について(承前)

しかして、この点にかんしてエンゲルスがつぎのように説明しているなかには、納得のゆかないことがある。すなわちエンゲルスはさきに引用した箇所のつぎでつぎのようにいっている。「銀行業者というものは、貨幣形態で自由にならざる社会的資本の——貸付の形態での——配分者として振舞うことに慣れ切っているものだから (hat sich so sehr daran gewöhnt)」。銀行業者にとっては、かれが貨幣を手離すあらゆる機能が貸付のようにならざる (als ein Verleihen vorkommt)」。かれが拂出す一切の貨幣が、かれにとっては前貸として現われる (erscheint ihm als ein Vorschub)」。もし貨幣が直接に借入にたらしむ (auf Anleihe) 支出されるのであれば、これは文字どおり正しい (註一)。もし貨幣が手形割引の形で投ぜられるのであれば、それは事実上、銀行業者自身にとって、手形の満期までは前貸である。かくて、前貸でない支拂などはかれはできないという表象が、かれの頭の中で固められる。しかもその前貸というのは、利子または利潤をえる目的でなされるあらゆる貨幣投下は、経済学的には、私人としての性質におけるその貨幣所有者が企業者としての性質における自分自身にたいしてなす前貸と看なされるといふ、ただそれだけの意味での前貸ではならぬ (註二)。そうではなく、銀行業者が取引先にたいして、後者の自由になる資本をそれだけ増加させるある額を貸付として (Leihweise) 渡すという、規定された意味での前貸である」(三四六八頁)。

オーヴァストーン等が、銀行業者が取引先に与えるものを資本と呼び、資本を前貸すると見ているのは、たんに、エンゲルスのいうように、貨幣資本を貸付の形態で配分することに「慣れ切っている」ためというよりは、有価証券担保の貸付であっても手形割引であっても、銀行業者にとってはいずれも貨幣を貸付資本として投じることであるからであり、もっぱらその貸付資本の立場にかれらが立っているからである。すなわちそういう客観的な基礎があるのであって、それが頭脳に反映しているわけなのである。(エンゲルスもここで、「かれが拂出す一切の貨幣が、かれ

にとつては前貸として現われる」と記しているが、この *erscheint als* は「現われる」と一応訳しておいたが、「慣れ切っているものだから」という行文上からはむしろ長谷部氏が訳されているように「前貸のように見える」と解した方が妥当と考えられる。オーヴァーストーン等もっぱら貸付資本の見地に立って述べていながら、しかもそのときそういう見地にのみ立っていることを明確に意識していない。混乱の大部分はそのために生じているのである。そこでつねに追加資本を貸付けるようにいつていることは批判されねばならないのであるが、そのさいにまず右の見地にのみ立っていることが明かにされねばならない。「慣れ切っているものだから」では、オーヴァーストーン等がなぜ混乱しているかを明確にすることが、そしてかれらの見解を正しく批判することが、できないのである(註三)。

(註二) 前号で、マルクスが「人的信用にたいする直接的前貸」といつているこの「直接的」とは、手形割引のさいには手形の交拂人にたいして直接に前貸することではなく、割引依頼人から手形を買うことによつて、つまり間接的な仕方である。手形の交拂人にたいして前貸することになることに對置していつているものであつて、貸付が無担保であるか担保付であるかにはかわりはないのであり、「人的信用にたいする直接的前貸」は無担保貸付であるが「直接的前貸」が無担保貸付なのではない、と記し、そしてそれにつけ加えて、エンゲルスが上に引用した箇所「直接に」といつているのもこれと同様であるとしておいた(九一頁)が、エンゲルスはここで、「前貸」と「資本の前貸」とを混同し、同一視して述べているようであるから、右のようにならぬ切つてしまうことはできないと考えられる。この点訂正を要するので、右九一頁六行目「なおエンゲルスも」から九行目「いうまでもない」までは削られなければならない。

(註三) この「利子または利潤をえる目的でなされるあらゆる貨幣投下は、経済学的には、私人としての性質におけるその貨幣所有者が企業者としての性質における自分自身にたいしてなす前貸と看なされるという、ただそれだけの意味での前貸」という説明と、書入れⅡの末尾で述べている「第二および第三の場合においては、たかだか、どの資本投下にさいしても人は『資本を前貸する』という意味においてにすぎない。この意味では銀行はAに貨幣資本を前貸する」という説明とは、同じことをいい方かえていつているものであると解されるが、有価証券担保貸付のさいにも手形割引のさいにも、銀行の行う前貸は

いわゆる「貨幣の前貸と資本の前貸」の問題について(承前)

かかる意味での前貸よりも、より規定された意味を持つている。すなわちそのさい銀行は貨幣を利子生み資本として投下するのである。また、エンゲルス自身も、有価証券担保のさいには、「返済を条件としてかれに貨幣が支拂われたのだという意味での前貸」が行われているといっているのである。「資本がその出発点に復帰するということは、總じて、資本がその総循環において行う特徴的運動である。このことはけっして利子生み資本のみの特徴ではない。利子生み資本を特徴づけるものは、外面的な、媒介的循環から分離された、復帰形態である」(Ⅲ三八〇頁)。

(註二) このようなことはエンゲルスもちろん承知の上のことであろうと考えられるが、説明の仕方にしたがうと、そうは受けとれないのである。なおここでエンゲルスは、「もし貨幣が手形割引の形で投ぜられるのであれば、それは事実上 (In der That)、銀行業者自身にとつて、手形の満期までは前貸である」と記し、さきの「慣れ切っている」ためという説明と喰いちがう説明をしている。しかしこの場合、すでに見たところの、書入れⅡの末尾で与えている——右の註二でも掲げておいた——「この意味では銀行はAに貨幣資本を前貸する」(傍點—三宅) という説明を考慮に入れると、なんともいふことができなくなる。

ついでエンゲルスは、「この表象こそは、銀行の帳場から経済学に移されると、銀行業者が自分の取引先の手に現金で委ねものは資本であるか、それともたんに貨幣——流通手段つまり通貨——であるか? という混乱させる論争問題をひき起したものである。この——根本的にはかんたんな——論争問題を解決するためには、われわれは銀行の取引先の立場に立って見なければならぬ。銀行の取引先はなにを要求し、かつ入手するか、ということが問題なのである」(Ⅲ四六八頁)として、さきに見て来たような考察をしているのである。

いまこの考察を「前貸」という点から取纏めておくと、「銀行業者が取引先にたいして、後者の自由になる資本をそれだけ増加させるある額を貸付として渡すという、規定された意味での前貸」が行われるのは無担保の場合だけである。この場合についてのみ「資本の前貸」が行われたといえる。有価証券担保の場合には「返済を条件としてか

れに貨幣が支拂われたのだという意味での「前貸」が行われる。「この場合に行われるのは貨幣の前貸であるが、資本の前貸ではない」。手形割引の場合には銀行と割引依頼人との間にかんしては、右の意味での「前貸の形態まで消滅する」。「この場合に行われるのは、ぜんぜんなんらの前貸でもなく、まったく普通の売買である」とはいえ、「それは事実上、銀行業者自身にとって、手形の満期までは前貸である」(註)。筋が通るような拾い方をすると、エンゲルスはこのように説明していることとなる。

(註) 「第二および第三の場合においては、たかだか、どの資本投下にさいしても人は『資本を前貸する』という意味においてにすぎない」。

オーヴァストーン等はいずれも貸付資本にたいする需要であり、貸付資本の提供だということから、すべてを「資本の前貸」と塗りつぶしていたのであって、これを批判するためには、右の立場から抜け出て、「銀行の取引先の立場」に立つことが必要である。したがって「銀行の取引先の立場」に立って見なければならぬとエンゲルスがいっているのは、正当な指摘である。——そしてマルクスがオーヴァストーンを批判するさい、この立場からつねに衝いていたことはすでに前号で見たごとくである——。そしてエンゲルスは、「銀行の取引先はなにを要求し、かつ入手するか」ということが問題なのであると正しく問題を提起したのであるが、しかもなお、その問題を——マルクスとちがって——一面的に考察したにとどまったのである。

ところで、右の論争問題は、「銀行の取引先の立場」に立つのみではいまだ「解決」しえないものであった。トック、フラートンは、銀行業者の立場に立っていたことはオーヴァストーンと同様であるが、しかしそこで銀行業務の実践上にも重要なものとして、銀行が前貸するものは「資本」であるか「通貨」であるかという問題を出して論じ

ているのであって——オーヴァーストーン等の場合にはかかる対立は生じえない——、これを「解決するためには」、まさに銀行業者の「立場に立って見なければならぬ」のであった。エンゲルスはこのことに気がつかなかった。したがってマルクスが「さて、Aにたいする銀行の前貸は、どの範囲で資本の前貸と看なされ、またどの範囲で支拂手段のたんなる前貸と看なされるべきであるか？」という設問をしているのにたいして、書入れIIのような答を与えてしまったのである。

なお最後に、だがいわゆる「貨幣の前貸と資本の前貸」についての「論争問題」としてはともかくとして、問題は以上をもつてすべて「解決」したわけではない。つきにいま一つ、社会的再生産の見地、とでもいうべき「立場」からの考察がなされねばならない。第三十三章「信用制度下の流通手段」のなかでの左のマルクスの記述は、かかる見地に立っての考察としか読み取りえないものであるが、しかしまさにこの記述を、エンゲルスは、エンゲルスの与えた説明とほぼ同様なことをマルクスも述べているという例証として、書入れIの末尾の段で掲げているのである。

「流通手段の支出と資本の貸出との間の區別 (Der Unterschied zwischen Ausgabe von Umlaufmittel und Ausleihen von Kapital) は、現実の再生産過程においてもよく示されている。生産上の種々の諸成分がいかんして交換され合うかは、すでに (第二部第三篇) われわれの見るところである。たとえば可変資本は、物的には、労働者たちの生活手段——かれら自身の生産物の一部——なのである。だが、可変資本は、労働者たちに断片的に貨幣で支拂われる。この貨幣を資本家は前貸しなければならないのであるが、かれが前週に支拂った旧貨幣をもって次週に新可変資本をふたたび支拂いうるかいなかは、信用制度の組織に大きく依存している。社会的総資本の種々の諸成分の間の、たとえば消費手段と消費手段の生産手段との間の、交換行為においても同様である。これらのもの

の流通のための貨幣は、すでに見たように、交換者たちの一方または双方によって前貸されねばならない。そこでこの貨幣は「長谷部氏訳ではなぜか「この資本は」となっているが、この \$ はあきらかに貨幣「流通内にとどまるのであるが、交換の完了後には、つねにふたたび、それを前貸した者の手に復帰する。ただし、それはかれによって、現実に就業しているかれの産業資本をこえて前貸されたものであるからである（第二部第二十章参照）。「以下をエンゲルスは引用している。俵点はそのさいイタリックにされているもの」信用制度が発達して貨幣が諸銀行の手に集積すれば、銀行が、すくなくとも名目的には、貨幣を前貸するものである。この前貸は、流通内にある貨幣にのみ関連する。それは流通手段の前貸であつて、これによって流通させられる諸資本の前貸ではない」（Ⅲ五七六—七頁、Ⅰ）内一三宅）。

右の文章は、銀行のなす前貸に流通手段の前貸と資本の前貸とがあり、ここで述べているような場合には「流通手段の前貸」だ、などということをしているものではない。そうではなくて、社会的な再生産の見地から見ると、銀行が前貸するものは、つねに流通手段であつて、資本——現実資本——を前貸するのではない、ということをしているのである（註一）。前号の末尾で、「次稿では併せて、標題の問題と関連しているいま一つの問題の解決を試みておくこととする」と記しておいたのは、この問題のことであつて、これは右のように解されるべきであると考えられよ（註二）。

（註一） たとえばトゥックを批判しているところでマルクスが「つぎのように述べていることは周知のごとくであるが、右の説明はこういふことと関連があるのである。「……所得の実現のためであろうと資本の移転のためであろうと、貨幣は売買または交換において、購買手段または交換手段として、広義においては流通手段として、機能する。貨幣がその支出者または受領者の計算上で受けとるところの、それがかれにとって資本を表示するか所得を表示するかという一歩進んだ規定は、このことには絶対に影響しないのである」（Ⅲ四八五頁）。

い、いわゆる「貨幣の前貸と資本の前貸」の問題について（承前）

〔註二〕 銀行が前貸するものはつねに流通手段だというこの指摘は、また、もって当時のマクラッドなどのいわゆる信用創造論——すなわち、貨幣そして信用は、諸商品を移転する場合ばかりでなく、無担保で信用が与えられるようなさいには、新生産物を創造する、かくて信用は生産的資本である、といった——を粉碎することにもなっている。なお、マルクスは『資本論』第一巻でこのマクラッドについてつぎのように記している（I—二六一頁、註二二）。——『生産的諸目的に充用される通貨は（一）資本である』（マクラッド、『銀行業の理論と実践』、ロンドン、一八五五年、第一巻第一章）と。

以上をもって、エンゲルスの書入れI IIの検討を終えることとする。

前号で行論の順序について記したさい、余裕があれば補論としてこの問題についての従来の理解の二三について検討を試みておくこととしたいと記しておいたが、差当ってはこれは省略する。なお、エンゲルスの書入れについては、例えば、拙稿「利子生み資本小論（一）」の末尾の註で記しておいたように、エンゲルスの見解についてなされている若干の批判にたいしてはエンゲルスの見解が擁護されねばならない。いづれも、本論を読まれるならば、ここにあえて補論をつけ加えておく要はないであらう。

附記。前号では標題を、いわゆる「貨幣の貸付と資本の貸付」の問題について、としておいたが、標題は本号の表記のように改める。また、前号六三頁終りから七行目のはじめから同六行目の頁の指示までを削る。